

文末詞の言語学



0130410112



11204101125

藤原与一

目次

緒言	付 筆者既稿 文末詞研究文献	5
序章	文末詞の言語学へ	9
第一節	文表現の結部	9
第二節	文末詞	13
第三節	文末の所	15
第四節	訴え心意の普遍性	17
第五節	発話詞・間投詞と文末詞（発話要素・間投要素と文末特定要素）	23
第一章	「詞」の論	27
第一節	現実のもの	27
第二節	文末特定要素の遊離性	35
第三節	発話詞・間投詞・文末詞	38
第四節	関係諸説	40
第五節	非 辞	42

第二章	文構造と文末詞	43
第一節	文構造の語順と文末詞	43
	└─ 文初決定性と文末決定性	
第二節	日本語・英語・中国語の文構造と文末詞	46
第三節	諸言語の類型学的分類	55
第三章	文末詞の機能	57
第四章	文末詞の意味作用	63
第一節	文表現の特定機能者	63
第二節	文末詞(特定文末部)の発散する情意	64
	└─ 意味作用	
第三節	文末詞(特定文末部)の示す知的内容	67
	└─ 意味作用	
第四節	文末詞(特定文末部)のパトスの内実とロゴスの内実	70
第五節	文末詞の意味作用	74
第五章	日本語文末詞の生成発展	77

目次	
第一節	史的考察……………77
第二節	現代日本語方言状態上の「ヤ」文末詞……………88
第三節	日本語文末詞の繁栄……………99
第四節	日本語文末詞の繁栄 つづき……………116
第五節	現代の文末抑揚……………122
第六節	文末詞の隆替……………125
第六章	談話活動と文末詞……………129
第七章	文末詞と諸外国語……………135
第一節	「文末詞および文末詞的なもの」の世界……………135
第二節	ドイツ語のばあい……………136
第三節	フランス語のばあい……………140
第四節	英語のばあい……………143
第五節	インドネシア語のばあい……………147
第六節	タイ語のばあい……………152
第七節	アラビア語のばあい……………159

第八節	蒙古語のばあい	161
第九節	朝鮮語のばあい	167
第十節	中国語のばあい	177
第八章	言語と文末詞	195
	——日本語にはなぜ文末詞が栄えているのか——	
第一節	諸言語の口頭語の世界	195
第二節	対話文の世界	196
第三節	日本語での文末詞生成発展の因	197
結 章	文末詞言語学	201
あとがき		205

緒 言

『文末詞の言語学』という大著が世に出ることを、私は願望します。
本冊は、その願望の根拠を明らかにしようとするものであります。

筆者既稿 文末詞研究文獻

- 1 『日本語方言文法の研究』 岩波書店 昭和二十四年
- 2 「筑後柳河ことばの『メス』と『ノモ』」『近畿方言』15 昭和二十七年九月
- 3 「日本語表現法の文末助詞 ―その存立と生成―」『国語学』第十一輯 昭和二十八年一月
- 4 東条 操編『日本方言学』の「文法篇」 吉川弘文館 昭和二十八年
- 5 『日本方言地図』の「文末助詞『ナモシ』類その他の分布図」吉川弘文館 昭和三十一年
- 6 「対話の文末の『よびかけことば』 ―ナモシ類その他について―」『広大文学部紀要』 昭和三十一年三月
- 7 「方言文末助詞（文末詞）の研究について」『方言研究年報』第一卷 昭和三十一年十二月
- 8 「日本語文法の記述体系」『国文学放』第二十三号 昭和三十五年五月
- 9 「Cesationalns in the Japanese Dialects」『Monumenta Nipponica』VOL. XIX NOS. 1-2 1964
- 10 「瀬戸内海域の文末詞『ナー』『ノー』」『方言研究年報』第八卷 昭和四十一年三月
- 11 「山形弁」と『宮城弁』『国語学』70 昭和四十二年九月
- 12 「東北方言『文末詞』の一研究」『方言研究年報』第十卷 昭和四十二年九月
- 13 「Word-Geography of Japanese」『Zeitschrift für Mundartforschung』1968
- 14 『日本語方言文法の世界』 搞書房 昭和四十四年
- 15 『方言文末詞（文末助詞）の研究』 広島大学文学部紀要 特輯号2 昭和四十七年二月
- 16 「動詞系の文末詞」『方言研究年報』統一 昭和五十二年十月
- 17 「なもし」問題討究」『方言研究年報』統一 昭和五十三年十月

- 18 『方言文末詞（文末助詞）の研究（上）』 春陽堂書店 昭和五十七年一月
 「名詞系の転成文末詞『モノ』」 『方言研究年報』続七 昭和五十七年十二月
 20 「特異な文末詞『ダ』」 『言語の世界』Vol.1 No.2 1983
 21 『方言文末詞（文末助詞）の研究（中）』 春陽堂書店 昭和六十年五月
 22 『同（下）』 同 右 昭和六十一年九月

序 章 文末詞の言語学へ

第一節 文表現の結部

「結部」というのは、「末尾・末部」などということばをふまえて、考えついたもの
ります。ただに「末尾」と言うのでは、その機能を十分に言いあらわすことができま
せん。「末部」と言っても同様であります。「末」の機能を、あるいは、「末」に認められ
る積極的な作用を、なんとかして言いあらわしたいと思うのであります。

まず、左の写真をごらんください。



これは、山形県温海温泉の町の路上で写されたものであります。昭和五十五年七月八日の朝のことでした。

私どもが、往時のここへの旅をなつかしんで、早朝の町を歩いていきますと、この写真のおばあさんがやって来ました。手づくりの餅を売る人でした。つい私は、おばあさんと話しこみます。二人

はしぜんに路傍にしゃがみこみました。別れる時に、おばあさんの言ってくれたことばが、

○モツケデス ノー。

気のどくですなえ。

でありました。(おばあさんは、このあとまた、「キノドクデス ノー。」と言ってくれました。)

のちに町内で確認し得たところでは、右のあいさつことばが、通常は、「モツケダ ノー。」と言われています。——おばあさんは、「キノドク」も言うくらいなので、しぜん「くです」の言いかたをしたのでしょう。土地弁では、「モツケデガンス ノー。」ともよく言われています。男性もこれを言います。親愛感をこめた言いかたには、「モツケデガンス チャー。」というものもあります。

右に認められる「ノー」が、私の、文末詞と言いたいものであります。

文表現の末尾に立脚して、遊離独立し、文表現のそこまでの意味作用を、発展的に集約するもの。

これが文末詞であります。「ノー」は、「モツケデス」や「モツケデガンス」を受容して、文表現の統括者になり、右に言う機能を發揮しています。「ノー」は、特定の文末成分と見ることができ、その遊離独立性にしたがつて、これを文末詞とよぶことができます。

文末特定の遊離独立成分、文末詞は、じつに、前掲の写真に見られるような環境に生きています。文末詞には、たしかに、この生きてはたらく特定の世界があります。言語研究上、私どもは、こうした世界・環境に息づくことばのあることを、あらためて重視しないではいられません。人間の生に密着したことばがそこにあります。

もう一枚の写真を見てください。



これは、金沢の兼六公園の中でのものです。たまたま、前掲の写真のと似たような風景でありま

す。私は、この写真を見ても、こんな所に、こんな状況の中に、文末詞は生きているのだな。と思うのであります。

人間の社会生活の中に、右の二つの写真に見られるような生活環境があることを重視し、そこに、私は、文末詞の言語学という名のはいつた旗を立てたいのであります。

「文末詞」と言いますが、かぎりもなく発想される対話の世界を、私は、言語研究上、特別に重視します。

第二節 文末詞

○わかりました。(自分がわかったことを言いあらわしたものに對する、)

○ワカリマシタ カ。

(これは相手に問うもの)

での「カ」が、文末詞であります。

○ワカリマシタ ネ。

(相手にやさしく問うもの)

○ワカリマシタ ヨ。

(自分がわかったことをややぶあいそうに言うもの)

○ワカリマシタ ワ。

(わかったことを女性が言うもの)

○ワカリマシタ ゾ。

(わかったことを告げる老男の発言)

これらを見くらべてください。「ネ」「ヨ」「ワ」「ゾ」が、それぞれ文末詞であります。おのおのが、遊離独立の文末要素であることは明らかであります。対応関係に立つこれらが、たがいに、自身の文末詞であることを自証しあっています。(右四文例を比較すれば、「ネ」「ヨ」「ワ」「ゾ」のま上で、そこまでのことばづかいから、一線、境をしなくてはならないことが明らかであります。う)。

従来、これらは、感動助詞とか終助詞とかよばれています。

私は、それらの先考にみちびかれつつ、ものが文末の特定機能者であることを重視して、名を文

末助詞としました。

この名が広くおこなわれるにいたった点は、私のもっとも光榮とするところであります。

文末との着眼と名とは、そこにはたらく特定者をとらえようとする、もっともしぜんな態度を表明し得たものではありませんまいか。なんといつても、たいせつなのは、文末特定の機能者という受けとりかたであります。——（それゆえ、多くの人が、文末助詞の名を肯定せられたのではないでしょうか。）

やがて、私は、考究を進め、文末に遊離独立するものを、助詞（辞）とは見ないことにしました。感動詞や間投詞に似たものとして、「文末詞」が受けとられたのであります。

今また、考察を重ねますれば、「文末詞」は、「文結詞」ともよんでみたいのであります。「末」と言うだけでは、どうも、文末特定の機能者のはたらきを言いあらわし得ないかのようだからであります。

第三節 文末の所

文表現の末尾、これは、私にとっては、熟視をさそわれてやまないものであります。視れば視る

ほど、ここの、格別重要な箇所であることが思われてきます。

人間がことばを言いあらわし、「一文」が成ったところで、そのことばがびたりととまるのですから、そこは、じつにおもしろい箇所です。——言語生活上の、肝心とも言われる箇所でありましよう。人間の表現意図のしめくりのつけられる場所がそこでありまよう。

話されたことばでの文終止には、音声の大きな休止があります。また、しばしば、声の上げ調子・下げ調子・まったいら調子の相があります。書かれたことばでの文終止にあつては、そこに、厳然と、「。」が打たれます。この符合の、なんとあざやかな存在であることでしょうか。

私どもは、特異特定の文表現末を、重要視せざるを得ません。

人間の話しことばのばあい、人が「文」を表現したとします。生活の中でのそういう話し手を見ていると、こういうことがありますまいか。その人が、ひとことを言ったひょうしに、相手の顔をチラと見ます。あるいは、チラと相手に目をはせます。この行動は(あるいは表情は)、ひとこと——一文表現——を、相手に訴えようとするものでありましよう。あるいは、言ったことが相手にとどいたかどうかをたしかめようとするものでもありましようか。要は、「訴えかけ、呼びかけ」というものでありましよう。こういう点から、私は、

文表現は訴えの形式である。

とも言っています。このばあい、形式とは、「かたち」、「方式」とも言いかえてみます。

文末詞というものは、人間の、そういう訴え、ないしよびかけを、具象化したものでありましよう。

こうした文末詞は、人間表現の訴えかけ・よびかけが普遍的なものであるかぎり、成立の普遍的なものでありましよう。この意味で、私は、文末詞あるいは文末詞的なものが、世界の諸言語に発生・成立していても、それは理の当然であろうと判断するのであります。

第四節 訴え心意の普遍性

文末詞的なもの、あるいは文末詞以前のとも言えるものが、日本語のほかにも見られます。——ほんの管見にすぎませんが。

英語のセンテンスに、

○ I think ………

というのがあります。かとおもうと、

○………, I think.

というのがあります。末尾の「I think」は、文表現末尾での特定発想によるものでありましょう。付加せしめたようなこの言いかたは、文末詞的なものを思わせます。——「文末詞以前」の形式とすることができましょう。

いつか、NHKの『続基礎英語』を聴いていましたら、

○ I have no magazine here, though.

という文が出ました。「本をみなここにおいてあるのですか。」との問いに対する答えをする人が、「そうだ。」と言ったあとで、右のことはをつけ加えたのでした。この時、私は、末尾の *though* におどろかされました。この *though* が、文末詞用法のものだと、私は直覚したのであります。この文を朗読する人が、*though* を、下げ調子に読んだこともあり、上げ調子に読んだこともありました。そのように、読みの調子も可動的であったのが、なお、私の心をひいたのです。ややとつぴかもしれませんけれども、私はここに、日本での電話ことは、

○私は山崎ですケド。

をおいてもみたいのであります。じつさいには、逆接の「けれども」や「けど」を必要としないところで、人々はよく、「ケド」を言っています。私は、この「ケド」を、文末詞化しようとする「ケ

なあと上げ調をとっているのではないのでしょうか。私はここに、あと上げ調という、文末詞代用の作業因子があると解釈したのであります。

もう一つ、英語の事例を出します。アメリカ英語に、「Yes.」の「Yeah」がさかんであります。私は、後者を前者の変化形と見ます。では、なぜ、「Yes」の〔e〕が、広母音〔a〕をよんだのでしょうか。これを、私は、

〔e〕母音の訴え効果の増大をはかつて、人はしぜんに広母音〔a〕をまねいた。

と解釈します。このことは、また、たとえば出雲方言の人たちが、「ネ」の訴えを、しぜんに「ネア」〔nea〕にしているのにおなじであります。訴えの効果をよくしようとする心理は、彼我に共通のものであります。どの言語にあつても、より広い母音のほうが、よりけざやかに、相手への訴えの効果を發揮するのではないのでしょうか。

中国語、現代の北京官話には、私どもはや文末詞と言いたいもの（したいもの）が見られます。
○你呢。

あなたは？

では、呢が、まさに文末詞然としていきましょう。

○你愛人呢。

あなたの奥さんは？

というのも、たしかに、「呢」文末詞をとらえしめるものでありましょう。NHKテレビ『中国語講座』（昭和六十二年九月三十日）で、榎本英雄講師は、「呢」という助詞をつかって問いの表現をおこしている。」と説明されました。また、氏は、「言うべきことばに「呢」をつけると、その具体的な意味がわかる。」と言われました。「呢をつけると」と言われるところが、注目にあたいます。

この「呢」は、ただに助詞と言うよりも、他の言いかたをしたのがよいのではないのでしょうか。私は、つけられる「呢」の独立性に注目して、これを文末詞的なもの（↓文末詞）と見ます。つきにとりあげられる例は、

○还是不買了。

やっぱり買わないことにするわ。（やっぱり買うのをやめにするわ。）

○你不看了。

見ないの？（もうやめにするの？）

であります。（後者例のばあい、これへの答えは、「不看了。（見ないよ。）」などがあり得ます。）さて、これらに見られる「了」は、おなじく榎本講師が、『文末の助詞』だと言われました。三例を通

観して、私どもは、「了」の文末詞的機能を認めることができるのではないのでしょうか。

なお、他言語にもわたりたく思いますが、それは私の能力をはなはだしくこえますので、ことをさしひかえます。

訴え心意の普遍的なものであることは、こうして、しだいに了解しうるのではないのでしょうか。文末での、訴えという特定の発想が、普遍的でありましょう。

文表現の末部に特定の訴え要素を希求するのは、表現心理の自然に属することとも言えるかと思えます。

文末詞あるいは文末詞らしきものが、どの言語に存在しても、それは当然とも言えることではないのでしょうか。日本語には、わけても、その傾向がつよいありさまです。これは、文表現構造にもとづくことでありましょう。

文末詞の世界は、文末詞以前のなもの（形式）の存立に、深くかかわっています。ここでは、文末詞的な想念の広い流通の予定されるところが重要視されます。

文末詞化、たとえば、日本語で、「モノ」や「コト」が文末詞にもなっているのは、右に言う想念

の流通の盛大にもとづく、一種当然の現象とも解することができます。

第五節 発話詞・間投詞と文末詞

(発話要素・間投要素と文末特定要素)

考えてみますと、発話詞(三十八ページ)の「オイ」とか「コラ」とかも、これが、文表現冒頭にはたらく時、ものはまさに訴えの心意を発揮しています。「ネー」が発話詞たる性格を発揮して文頭にあつても、これまた、「ネー」とつよく訴えかけるものであります。

英語の、「You Know,」「You see,」などというのにしても、文表現上、これらは、発話要素として、つよく訴えの機能を發揮していると解することができましょう。私は、ひとくちに、「文は訴えの表現である。」と言います。訴え心意のはたらきは、文表現上、随所に認められるのではないでしようか。そのきわだつて明白なのが、文末に認められるとともに、文頭にも認められます。

また、文中にも認められます。いわゆる間投詞(三十九ページ)のはたらきがそれでありませう。日本語の方言での実例をあげるならば、

○キョーワ ケー オイエン トミーノー。 〈岡山弁〉

きょうは、これ、うまく行かないだろうも。

などというのがあります。「ケー」は「これ」からのものでありましょう。ケー（これ）と言ひあらわすのは、相手に対して、「これ」と言ひかけたものに相違ありません。――訴え心意はさほどつよくもないかもしれませんが、文中、これを間投したところには、表現者の、相手に対するなんらかのはたらきかけの気もちがうごいていることは、認められましょう。ものがあるからには、そのものはたらきは、よく認めなくてはなりません。そのはたらきかけの気もちは、広い意味では、やはり、訴えかけとも言ひあらわしてよいかと思われます。「それ」からの「セー」などではないところが注意されます。単に「これ」と言ひあらわすところが、訴えかけとも言える一種の強調となつていましょう。

文表現中の間投要素になつていくものには、人代名詞の「オマイ」・「アンタ」などもあります。語句の「アレです」などもあります。（これは共通語例ですが、方言例では、「アノコッタ」へアノことだぐなどがあります。）いずれも、相手の気をひくものになちがいありません。それは、訴え心意のつよいものとされましよう。

近ごろ、英語の中で見た一例には、

○Not as good as ours, mind you, but they were passable.

というのがあります。「mind you」には、「よく聞きたまえ」「いいかね」との注がついていました。私は、思いがけなくこの例に接して、言語がちがっても、似たような言いかたがあるものだと痛感しました。

いずれにしても、間投要素あるいは間投詞のはたらきが、文末特定要素あるいは文末詞のはたらきに似ています。どちらも、特定の、相手がたへの訴え心意を発揮しています。間投詞あるいは間投要素があるように、文末詞あるいは文末特定要素がありうるわけでしょう。

ついでに、英文の例を見ますなら、

○……; I think (believe);……

というようなものもあります。右の「mind you」に対して、ここには「I think (believe)」があります。英語の文表現にあっても、このように、文中での間投要素による訴えかけがあり得て、文末での特定の訴え要素もあり得ています。「訴え」の表現心理の自然性が、ここに広く認められましょう。日本語のばあい、他言語にも認められる右の自然性に即応して、構文上、色濃く、文末特定要素→文末詞を産みだしている状況が見られます。

発話詞・間投詞が、文表現上、それとして遊離独立することは明瞭でありましょう。これらとともに、文末詞もまた、文末端に遊離独立します。(↓第二章第二節第三節)

第一章 「詞」の論

第一節 現実のもの

「はやくしろつテバ。」などの「テバ」、あるいは「はやくしろつタラ。」などの「タラ」、こういうものが、いわゆる教科文法では、感動助詞あるいは終助詞とされています。——文末にはたらく特別の要素という見かたがなされています。

さて、「何助詞」とは言われていますが、右の例に明らかなおり、「テバ」や「タラ」は、直接には、上のことばに接着（合）してはいません。「テバ」や「タラ」が、「上者を」助ける姿勢をとってはいません。通常、助詞と言われるものは、「てにをは」とも言いならわされてきたとおり、かな一字であらわされがちのものであり、これは、接着（合）する上者を助ける地位にあります。「私」は「私が」などというのでは、「は」「や」「が」「私」を助けています。——「私」のはたらきを助けることになっています。等しく助詞とよばれる「終助詞」あるいは「感動助詞」は、はたして、

「は」や「が」のような助詞であり得ていまいしょうか。

人びとが、早くから、「テバ」や「タラ」を、文末の特定要素と見てきたところには、これらが、実質的には、直上のものを助けたりしないことの認定があるでしょう。

○まあおみごとですコト。

とあるばあいにも、「コト」は、かくべつ「です」を助けるわけではありませんまい。それにもかかわらず、これが、「格助詞」「接続助詞」などという助詞名に等しく、「何助詞」とよばれていてよいこととありましようか。

以下、方言世界について、「こんなものがあります。」といった気もちで、同趣のものを指摘してみます。

島根県下によく聞かれる表現法の一つに、

○コツチカラ イノー コイ。 〈石見東部例〉

〃こちらから帰ろうじゃないか。 〈小男間〉

○アノ ガキ ナグツチャロ コイ。 〈出雲例〉

あのがきをなぐつてやろうよ。 〈小男間〉

というようなのがあります。両文、どちらの「コイ」を見ても、これは、文表現上、直上者を助けられているには見うけられません。「コイ」は、ずいぶん自由につけそえられた、文の特定成分のようです。この「コイ」が「来い」からのものであるとすれば、ここでは、「来い」が、文表現上、文末特定の要素として利用されていると見られることになりましょう。じつさいに、「来い」の意のうすれた「コイ」になっているのは、「来い」が、文表現上、特定の用法にたてられているということでありましょう。「来い」は、もともと、動詞の命令形にほかなりません。助詞とは無関係です。そういうえば、さきの「テバ」も、「と言えは」からのものでしょう。したがって、これも、動詞性のものと言えます。「タラ」にしても、これが、「と言ったら」のものとしたら、やはり動詞性のものです。こういったものが、文末で特定の役わりを演じているとしたら、そのもののよび名も、助詞名にこだわらないで考えさだめてよいのではないのでしょうか。

かなり大胆に、「テバ」や「タラ」のようなものをとりきって文末特定要素と見、しかもあえて、と言いますか、依然としてと言いますか、これに助詞名をかぶせているのは、なんだか矛盾とも言えそうです。

つぎには、私自身の生いたった生活語の中から、事例を採ってみます。瀬戸内海中部の大三島北端にある集落の例です。

○ド― ユ―タ テテノ―ヤー。

どう言つたところでねえ。 (老女)

さきの「テバ」がひきはなされたように、この「テテ」もひきはなされます。その「テテ」に「ノ―ヤー」が直続しています。私自身の生活語感から言つて、故郷方言の「テテノ―ヤー」は、一体の文末分子です。「テテ」は「と言つたつて」を思わせるものでしょうか。その「テテ」に、「ノ―ヤー」がつづいた一体者「テテノ―ヤー」は、終助詞と言ふのにも感動助詞と言ふのにも、あまりにふつごうな長形分子です。――現実のものを見ていますと、とても「何助詞」とは言えない態のものが出てきます。

故郷方言から、もう一つ、長形のものを取り出してみます。

○ソガニ ケツコニ フカザ― イエ― ワノ―ヤマー。

そんなにけつこうに拭かなくつたつていいわねえまあ。 (老女)

「ワノ―ヤマー」については、「ノ―ヤマー」だけをひきはなすことも考えられましょうか。――「ノ」にアクセントの高音部もありますから。ですが、残された「ワ」は「イエ―」に直続するかというと、そうはなっていないません。やはり、「ワ」がはなれます。はなれた「ワ」は、「ノ―ヤマー」と合体する運命のものです。郷土人としての私などの意識内でも、「ワノ―ヤマー」が一体です。

九州、阿蘇山南麓で聞いた事例には、

○ホンニ ナーアタモシ。

ほんとにねえあなた。 (大女)

というのがあります。

○ホンニ ナーアタモシ。

とも言われています。土地の中年女性は、「ナーアタモシ」がよくつきます。と説明してくれました。「ナーアタモシ」が、熟しきった一体者です。これが自由につかわれて、じつさいには、音の長短やアクセントの高下に異同ができています。そのように自由につかわれる文末分子が、今は明らかに、助詞名ではよびかねるものです。

九州、大分県下から特異例をひきますならば、

○ハヨー イコー タナーチコ。 (アクセント失)

「早く行こうねえと言っているじゃないの。」

というのがあります。「タナーチコ」は、主として女性語であるとのこと。 「タナー」は、「あん

たなあ」のつづまったものでしょう。「チコ」は、「言う」を内在させているものでしょうか。「チ」には「と」が感得されます。右の例文で、「タナーチコ」が、「行こう」からはなれたものであることは、明らかでありましょう。はなれて文末にはたらく「タナーチコ」は、「タナチコ」とも言われています。「タナーチコ」が、また、「チコタナー」とも言われています。このように自由に変形させてもいる要素、これは、終助詞あるいは感動助詞などとよぶには、あまりにふつごうな分子のようです。

長形ではなくても、ものが、たしかに、文末ではなれた存在であることを思わせる事例を、つぎにあげてみましょう。一つは、「ワレ」というものです。——これは代名詞の「われ」に関係の深いものでしょう。愛宕八郎康隆氏の教示によれば、石川県加賀東南部のことばには、

○シヤーナ コト コチベリ サラスナワレ。

ここにらしいことをべちやくちやしやべるな、おまえ。 (中年以上の男性)

というのがあります。自由にすえおかれた「ワレ」が見られましょう。

東京語の女性ことば「ワ」の類型に属するもので、奥羽地方内には、また、特異なものがあります。宮城県下の一例は、

○コツチャ コライ ワ。ハヤク。

こちらへ来なさいね。早く。
というものです。

○ナゲテ ク [E] ナイ ワ。

「投げてください。」

というのがあります。東京語の「ワ」からすれば、ずいぶんこと変わった「ワ」でありましょう。

「ワ」がこのようにもすえおかれるのを見ても、私どもは、助詞名ではよびにくいものがここにあらんと考えさせられます。

伊予弁や尾張弁の「ナモシ」、九州は肥前方面の「バイタ」（わたくし系の「バイ」とあなた系の「タ」とのむすびつけられたもの）というぐあいに、助詞なみに上をすぐ助けるのではないことわかりやすい要素が、諸方言上、つぎつぎに多く見いだされます。これらの要素は、英語での言い
かた、

○It is very fine today, isn't it ?

の「isn't it」の地位に似た地位のものとも言えるのではないのでしょうか。「isn't it」は「,」のつ

ぎにおかれています。

終助詞などと言われている「テバ」(と言えば)や「タラ」(と言ったら)なども、ものが辞ではないことが、今また明らかであります。

ものが助詞であれば、それは辞とされます。元来、助詞も、助辞と言われるべきものであります。松下大三郎氏は、『改標準日本文法』(紀元社 昭和三年四月)で、この点を明確にしていられます。助動詞を助助辞としていられ、いわゆる助詞を静助辞としていられます。(このとりあつかいは、世に、助詞・助動詞の全体が助辞と言われてきたのにも、よく適合します。)助詞すなわち静助辞は、要するに、いわゆる「てにをは」をさすものとされましょう。「タラ」も「バイ」も「ナモシ」も、「てにをは」ではありません。

松下大三郎氏は、詞と辞の別に、「実質的意義のありなし」を考えわけていられます。これは、わかりやすい区別法ではないでしょうか。複合形式の長形の文末特定要素になればなるほど、それらからは、実質的意義をくみとることが容易であります。

第二節 文末特定要素の遊離性

文末特定要素が助辞でなければ、それは、遊離性の認められるものはずです。

文末に分立するものは、もとよりのこと、その遊離性が認められます。

文末特定要素は、遊離独立の成分（↓機能者）と認めることができます。

詞辞論からすれば、辞はまさに助辞であつて、おのずから、上者に対する接続分子であります。

これに対して、詞は、先天性の接続分子とはされないものであります。詞には、非接続分子としての、独自の全的機能があります。この全的機能を有するものに対しては、助辞は、先天性の接続分子として、おのずから半機能者たるものであります。

私どもは、多くの文末特定要素事例を見て、これを、半機能者とすることはできません。つねにその遊離性が顕著だからであります。

例説によりましょう。

○ ヨカ_↓バイ。

いいわよ。

（若妻↓夫）

これは、私が佐賀県下で聞いた一例であります。——私が、その夫妻さんに、車で送られた時のことでした。これをくりかえし発言してみても私は思うのです。「ヨカ」と「バイ」との間には、おかすことのできない一線が引かれている、と。いかに、これが早口で発言されたばあいにも、それに、この文アクセントがあるかぎりには、「ヨカ」と「バイ」との、表現上の界線は明らかであります。

○ヨカ| タイ。

いいよ。

(中年男性間)

「タイ」は、「ヨカ」に密着して、単純に接続分子となっているとは見られないと思うのであります。「ヨカ| ト。」(いいよ。)というのにしても、「てにをは」の「ト」が、「ヨカ」にわけなく従属せしめられているとは見られないと思うのであります。「ト」も「タイ」も、前述の半機能者であり得てはいません。

肥後弁、それも阿蘇南麓で私が聞きとめたものに、

○チョージヨ アタツ。

ありがとうございます。(ありがとうございます。)

があります。全体は、「チョージヨ」に「アタツ」が累加されたかっこうです。が、人々の日常生活

では、この全体が、すんなりと一文表現にされています。これでの「アツツ」は、文表現に的確に生かされた文末特定要素であります。その遊離性が、ここにまことに顕著でありましょう。

奥羽地方での、

○アノツ シ「二」。

あのね。

にしても、「シ」の遊離性が顕著であります。——「シ」は、助辞として、接続分子のさまを呈しているとは見られません。考えてみれば、いわゆる共通語の「あのね。」にしても、「あの」に「ね」がつづいているのですから、じつは、妙なつづきがらとも言えます。このつづきがらでの「ね」は、やはり、遊離性の明らかなものでありましょう。

○アノ ヨー。

ともなりますと、「ヨ」のアクセントゆえにも、これの分立性・遊離性が明らかであります。「アノ ヨー。」の使用実際では、その意味が、「あのほら。」にちかいかともあります。この「ほら」は、「あの」に対して、分立するもの、遊離するものであります。

分立する辞、遊離する辞、孤立する辞、ということとは、私には、考えられません。

第三節 発話詞・間投詞・文末詞

遊離性の詞に、発話詞(二十三ページ)——文表現の初に発せられる特定の詞——もあります。

私は、「発話」ということばを、センテンスを意味するものとはしません。utteranceが「発話」と訳されたとすれば、それはむしろ「言表」と訳されてもよかつたと、私は考えるのです。「発話」という以上は、私としては、「発」の字を重んぜざるを得ません。こうして、私は、文字どおりに、発話という術語をつかいます。

発話詞の中味を三分することができますでしょうか。

発話詞の第一種は、

○おい、君。

○そら、いくぞ。

での、「おい」「そら」のようなものであります。この種のもは、「よびかけことば」(呼びかけ詞)と言われてよいものであります。

発話詞の第二種は、

○はい、承知いたしました。

○うん、わかった。

の「はい」や「うん」のようなものであります。この種のもは、「応答詞」とよばれてよいものであります。

発話詞の第三種は、

○まあ、そうですね。

○あら、いやだ。

の、「まあ」「あら」のようなものであります。この種のもは、感動詞とすることができましょう。発話詞の前二種は、「自分↑↓相手」に関するものであります。第三種の感動詞は、「自分↑↓相手」本位には考える必要のないものとされましょうか。

間投詞（二十三ページ）は、文字どおり文中に間投される詞であります。これは、間投助詞とはされません。なぜなれば、文中に間投されて、それは、前にも後にも接続しないからであります。

（語形上の接続関係を見せないからであります。）

発話詞・間投詞の立てられるのと同様、文末詞が立てられます。文表現上、双方が、相關的に、詞としての存立を見せています。

この相関に即応して、また、名称を設けますなら、発話詞は、文末詞に対して、文頭詞とよぶこともできます。間投詞は、文中詞ともされましようか。さて、発話詞のよび名をたてに、文末詞の他名をもとめるとするならば、終(集)結詞・文結詞といったようなものが得られましようか。

第四節 関係諸説

私が文末詞とよびたいものを、早くに、孤立の成分と認めて、これに孤立助詞との名を与えられたのは、安田喜代門氏であります。同氏の『国語法概説』(中興館 昭和三年)に、その名が見えます。後藤蔵四郎氏は、早く、その著『出雲方言考』(郷語改善会 昭和二年十月)で、感詞の名を用いられました。たとえば、「ね或ねい」が「感詞」とされています。その説明は、「先方の首肯を求める場合に用ゐる。(以下略)」であります。

中国語に関しては、藤堂明保氏の『中国語概論』(大修館書店 昭和五十四年五月)に、「語気詞」の名が見えます。ものは「啊・吧」などです。日本の中国語講座などでは、「文末の助詞」などの言いかたがうかがわれる中で、語気詞との指摘は独自です。呉主恵氏の『支那言語組織論』(生活社 昭和十六年十月)には、「後置詞(終止助詞)」との名が見え、

感嘆の後置詞に例をみれば、啊、哪、呢、罷のごときものは丁度日本語の「…ぞ」「…ぜ」「…ね」「…き」に等しきものと考へることができる。西藏語も支那語の呢、哩、哇、吧に相當するもので、*ni,hi,ha*の語音がとくに存在しており、何れも後置詞の役目を果してをるやうである。

とあります。「感嘆の後置詞」とまで言われながら、結局は、それが終止助詞とされています。呂叔湘氏主編の『現代汉语八百詞』（商务印书馆 一九八四年・北京）にも、「助詞」の名辞が見られます。

「感詞」「語気詞」「感嘆の後置詞」などの指摘は、その語にしたがうかぎり、ものを詞として把握したさまが明らかであります。私はこれに敬意を表します。しかし、なお、つけそえてみたいことがあります。これらの把握は、おおよそ、詞を感声的なものとしてとらえてはいないでしょうか。それは、把握の態度がせますぎると考えるのです。文末詞は、文表現意識の展開を承けてまとめる包括的なはたらきのものです。表現心理のみならず、表現論理をも承けまとめて、それらを全一的に表白するのが文末詞です。いわば、知的・情的な内実を渾然と示すものであります。このゆえに、私は、ひとまず文末詞の名にしたがつているしだいでありませぬ。

第五節 非 辞

私が文末詞とよぶもののために、それが文末詞であることを考究するには、これが、辞とはしがたいものであることを見きわめていけばよいわけでしょう。辞が、「かくかくのものである。」とされたら、そのわくからはずれて出るものは、非「辞」であります。

文末特定要素となつてはたらく遊離性の因子は、上乗の考究により、非辞とされましょう。

私は

の「は」と、

○ヨカ| バイ。

の「バイ」とは、ものの性質がちがうとしなくてはなりません。

第二章 文構造と文末詞

第一節 文構造の語順と文末詞

└文初決定性と文末決定性┘

多くの言語にあつて、その文構造に、いわゆる語順が認められましょう。

日本語もまた、通常のセンテンスが、すべて文構造体であり、これは、二個以上の語の順列からなっています。

一般に、文構造にあつて、構造内部の諸語が順列をなせば、これによつて、その言語独自の意味作用が発揮されます。私どもは、その意味作用に追隨して、語の順列の意味を解釈することができます。

〔その時、言語によつて、表現の陳述を決定する主要素が、順列の前部にあるのと、順列の後部にあるのとを弁別することができます。〕今は、所論のため、あえて、主要素の前部か後部かあるば

あいだけを問題にします。)

主要素が前部にあつて、表現の陳述が決定されれば、これは、表現を文初で決定する文構造と見ることができましよう。逆に、主要素が後部にあるばあいは、これが、表現の文末決定の文構造と見られます。

ここに、私どもは、言語の表現性格として、文初決定性と文末決定性とを識別することができません。

私の言う文末詞は、文構造の語順にあつて、(表現の文末決定の)文構造の末端に存立するものがあります。

ここで一つのおこわりをしておかなくてはなりません。「文末詞」との呼名は、いわば品詞論的な処理にあつてのものです。文構造の認められる表現の次元は、品詞論の次元を超えています。その表現次元に文末詞が存立するのは、「特定文末部」として存立するものであります。——このばあい、私どもは、ことが表現に属するゆえ、いわゆる文末詞の、文表現上に活動する実態を、品詞論上の名目をもつてよぶことはできません。「特定文末部」などとの別称が必要であります。

しかしながら、議論の遂行上、簡明を旨として、私は、文表現次元の文構造を論じる

にあたって、ときに、「文末詞」の名を用いることがあります。

さて諸言語にあつて、文末詞が存立するかしないかは、まったく、言語そのものによりけりであります。文末詞の存立・生成の認められる言語は、その文構造が、いわゆる語順にあつて、文末詞と他の諸語との、独特の有機的關係を示しています。

文末詞は、そもそも、主情的なはたらきをつよく見せるものであります。

文表現は、基本的に、あるいは終局的に、訴えの作用を表示するものでありましょう。その「訴え」は、本来、主情的な色あいの濃いもののはずです。訴え作用に深く関連する文末詞は、おのずから、主情的な色あいの濃いものになっています。

文末詞とされるようなものが、表現の文末決定の文構造の、語順の末端にあらわれているのは、いかにも当然でありましょう。文構造の後部または末部に、文表現の主情性を指示する語要素のほたらかない（ならばない）言語にあつては、文末詞もまた存立していないはずとされるのかと考えられます。

第二節 日本語・英語・中国語の文構造と文末詞

現代英語での、

○I don't know why.

というのを見ます。これに対応する日本語の文表現は、

○私はなぜであるのかわりません。

というのであってよいでしょうか。両方を比較しますと、前者は「don't」が前方にきており、後者は「ません」が最後にきています。文表現の文初決定のさまと文末決定のさまとが明白であります。つぎの例、

○Don't go over there.

○そちらへ行くな。(そちらへ行ってはいけません。)

の二者を比較してみても、文初決定と文末決定との様相が明白であります。

日本語のばあい、「私はなぜであるのかわりませんよ。」とも言えますが、これに対応させて、英語のセンテンスを、「I don't know why X (「何」に相当するもの).」とすることができるかとい

うのに、これは不可能事のようにあります。(英語表現の習慣には、その可能性がないと言えましようか。)
「Don't go over there」のあとに、表現者の主情を色濃くあらわすXをつけようとしても、方途がありません。そういうことを可能にする下地は、現代英語の文構造の文法に、できていないようであります。日本語でならば、すぐに、

○そちらへ行くなよ。(そちらへ行つてはいけませんよ。)(そちらへ行つてはだめだぞ。)
などと言いあらわすことができます。

日本語にあつては、文表現の末端に、言いかえれば、文表現の文構造の語順の末端に、特定要素「わ」・「よ」・「ぞ」といったようなものを、きわめて自在に、産み置くことができます。

別趣の英文、

○I gave it to him.

のばあいには、日本語での「彼に」に相当するものが、「to him」となっています。英語では、前置詞の「to」が、まさに「him」の前に置かれ、日本語では、その前置詞に相当するものが、「彼に」というように、後置詞になっています。小部分でのできごとではありますが、語順・語序での順列は、まったく反対ということで、これはやはり、表現法の大差であります。そのような状況下にあつて、英文は、右のとおり、文末に特定の「X」を見せることなどのないものとなっています。

ところで、右の英文に相当する日本文となりますと、

○私はそれを彼にやりました(やった)。

であります。このばあい、日本文だと、さらに、「私はそれを彼にやったんですよ。」などの言いかたにすることもできます。「やりました」に相当する「やった」を「やったんです」と延伸することができ、このさい、末尾にさらに「よ」を成りたさせています。日・英の、文表現構造の差が明瞭であります。

つぎには、

○Is it your book?

というのを見ます。これに相当する日本文は、

○それはあなたの本ですか。

だとしましょう。英文の「？」に対して、こちらには「か」が立っています。「？」は、「book」という名詞形のあとに置かれています。つまり、「？」が、名詞形で終わるセンテンスの末端に、意味作用の重要指標として特置されています。日本文のばあいは、特別符号を用いるまでもなく、「か」という語辞が、文表現の自然の流れのもとに流露しています。英文のばあいは「s」が文頭にあるので、文末には、しぜん「？」が用いられることになったのでしうか。日本語のばあいは、「Is」

相当のものが、「本です」の「です」に出ているので、問いの意味作用を表徴する特別詞が、その文末に、しぜんに——順当に（つづけて）——設けおかれることになったのでしようか。

以上、日・英をかんとんに比照してみたところでは、両者の文構造の相違のみに正比例して、文末詞生成の有無が見わけられるようであります。

現代英語の文構造に類似するものとも見られる中国語文構造をとりあげてみます。

英語で、

○When do you leave?

とあるものが、現代中国語の口語文では、

○您什么時候儿去啊。

とあります。「あなたはいつ 出かけられますか。」これは日本文であります。

英語の「you」は、文構造上、かなり後部にあり、中国語での「您」は、まったく日本語と同様、前頭部にあります。英文の前頭部をなす「When」に相当する中国語「時候儿」は、その文構造の中心ほどにあるというわけで、これも位置がはなはだちがいます。さて、英文には「？」が設けられており、中国語には「啊」が出ています。このばあい、英文の「leave」は、まったく文構造の後端に

あり、中国語にあっても、「去」は文構造の後部にあつて、この点、相方にあい似た様相が見られます。が、ここでゆだんはできません。英文には、「leave」をカバーする「do」が先置されています。「do」と「去」を見あわすかぎり、双方の文構造の差異は歴然たるものがあります。「do」leave」に対応する、簡潔な「去」が、中文では文末部にあつて、これにせんに「啊」がつづいています。文末詞「啊」は、こうして、日本語の「……出かけられますか。」の「か」同様に、しぜんの末尾存立者となっています。

以上に見られるかぎり、中国語の右のセンテンスは、日本語の「あなたは」のセンテンスと同構造になっていると言ふことができ、したがつてまた、ともに似たような文末詞を持っていると了解することができます。

上述のことをもつてすれば、私どもは、つぎのような解釈に達することができます。

判別一 中国語のセンテンスには、日本語のセンテンスに似た文構造のものが見られるか。

判別二 中国語の文構造には、英語の文構造から距つたものが見られるか。

判別三 文末詞の生成は、文表現上の文末決定性をささえる文構造に深く関連するものか。

※ ※ ※

私どもが、旧に、いわゆる漢文で学んだ中国語は、その構造が、はなはだ英語の文構造にちかいものでした。文表現上の述語のあとに目的語がくるといふことなどが、そのことをよく思わせました。

しかしながら、右に見られた中国語の一文は、そうした漢文調のものではありませんでした。

現在中国語には、その文表現の生活に、私の文末詞と認めたいものが、かなりよく出てくるようです。文末詞の個数を、いくつもかぞえることができそうです。

私は、これに注意して、中国語の文構造を調べてみるようになりました。といつても、私には、ほんのかんたんなことしかできていませんが。

第一には、いわゆる漢文調のものもよく認められます。

○我要这个。

○我想買件衬衫。

といったようなものが、まずあげられましょうか。

○小園、去洗臉。

のようなものもあります。

○我被他打了。

のようなものもあります。

○这是我的小意思。

のようなものもあります。

○他不会说。

のようなものもあります。

第二に、第一の類ではないものを、いくらかあげてみることにしましょう。

○一步一步来嘛。

○快走嘛。

○吃好了。

○好。照了啊！

これらはかんたんなものであります。

○好天气啊。

○晚上好。

○中文怎么样？

のようなものもあります。

○好吃吗？

○请休息吧。

のようなものもあります。

○我買魚去。

○在这几停車吧。

のようなものもあります。

やがてまた、

○小玉、你游得真棒！

のようなものも見られます。

○这个東西挺好的。

のようなものも見られます。

○该做的作业都做完了。

○今天的作业、你都做完了吗。

というようなのも見られます。

いずれも、文構造での語順・語序が英語ばなれしたものでありましょう。それだけに、これらを、日本語の語序・語順に類するものと見ることができましょう。

中国語での日常会話では、「是啊。」とか「你呢。」「喝吧。」「请吧。」とかの言いかたがよく聞かれます。おのおのの末尾にあるのは、私が、中国語の文末詞と見たいものであります。「是」「喝」などの簡潔なものに「啊」や「吧」がついているのは、文末詞がわけなくとり用いられていることを示すものでありましょう。日本語の生活で、「はい。」に関して、「はいよ。」と言ったりするのも、中国語の右のものなどに類することでありましょう。「はい。」という、文表現の、簡潔な一渾体に対しては、表現者はだれしも、すぐに、それを文末詞で修飾することができます。

以上、中国語について、私どもは、日本語の文表現構造に類したものを、そうとうに認めることができそうです。中国語のそのような文表現傾向に隋伴して、中国語の特定の文末詞が認められるのでしうか。

現代英語について、私どもが、日本語の文末詞に相当するものを、容易に認出することができないのに対して、中国語には、それに反する状況がかなり見いだされるのは、私のきわめて興味ぶか

く感じるところであります。

第三節 諸言語の類型学的分類

私は、

文末詞の成立が、文表現の構造の文末決定性に深くかかわるものであること。

を認めたいのであります。

文末決定性の顕著な日本語にあつては、言うところの文末詞が繁栄しています。文初決定性の英語にあつては、——またフランス語やドイツ語にあつても、文末詞の繁栄などは見られません。言語にとつての文末決定性こそは、その言語の「文末詞と文末詞の体系」を産むものではないでしょうか。

私は、諸言語の類型学的な相違を、一つに、文末詞の観点から考究していくとよいのではないかと、しきりに考えるものです。文末詞のかなり認められる中国語は、文末詞の大体系の認められる日本語に、類型上、ややちかしい関係にあるとしてよいのではないのでしょうか。現代英語などが、類型論的に、日本語などから遠い位置にあるのは、文末詞の不存立がそれをよく示唆していると

てはどうでしょうか。

私は、文末詞の問題を、一般言語学上の問題にしたいと思います。

できることなら、私は、文末詞の観点・視点をもって、諸言語にのぞんでみたいと思うのであります。

第三章 文末詞の機能

文末詞は、口頭の言語表現、その文表現にあつて、これを最終的に決定します。言いかえれば、文表現を文表現として、明確に成立せしめています。このことを言いかえれば、「文末詞の出現は、文の完全終止を意味する。」と言いあらわすことができます。ここに、文末詞の本格的な機能があるとされましょう。

もし、口頭の文表現に、文末詞形のものが出ないばあいにも、その文表現は、文末詞相当の音声指標によつて、明確に、文末決定の文表現たらしめられます。——つまり、その文表現が成就されています。

別に、これを、零記号の文末詞がはたらいているとも、見さだめることができましょう。どのようなばあいにも、文表現の完全終止にあつては、文末詞の本格的な機能が認められます。文末詞の機能に関しては、すでに、第一章の「詞」の論でもふれるところがありました。

文表現が、訴えの形式（——純粹形式）であるのに相応して、特定の訴え要素である文末詞が、

文終結にはたらくしだいであります。

文末詞の機能は、文終結機能とも言うことができます。「終結」を「完結」としてもよいでしょう。「完結」をまた、「結成」としてもよいでしょう。もとより、「表現決定」ともすることができましよう。

書記文章での文表現のばあいへも、論をうつすことができます。書記上のすべての文が、要するに、最後に句点を持っています。句点によつてとりむすばれた個々の文表現は、みな、零記号文末詞を持つていると解釈することができます。——そこにはすべて、零記号文末詞の文終結機能が認められます。

○矢ははなされた。

という書記文があつたとしますか。この一文は、「………た。」と言いきだめられるとともに、一個特定の個性文になっていきます。その個性色を成就する力は、句点「。」の直前にあります。そこは、零記号の文末詞が直視せられるところであります。

つきには、口話の文例について、文末詞の文終結機能を検討してみましよう。

○マユカ アガミテイ ナシャン ドウ。

猫が子どもを産んだぞ。 (小男間)

これは、与那国島の比川方言のことばです。(高橋俊三氏教示)「ドウ」は、この文表現を最後のに決定しています。その、全面的決定のおもむきが、ここに明らかであります。

京都弁の一例は、

○ムカシカラ カワツテ ナインヤ テ。

むかしから変わってないんだって？

(青女間)

です。上昇調の「テ」のはたらくことがあざやかであります。こうした特定要素が、一文の表現を、有力に完結しています。——一文は、まったく「テ」によって完結されています。

○ソーダ シ「」ー。

そうでしょう？

は、福島県の会津弁の一例です。「ソーダ ベー。」(そうだろう?)というのが、下位の言いかたで、前者は上位の言いかたです。なぜ上位のものとなるのでしょうか。「べし」に淵源する「べー」に対して、「シ」「ー」がはたらいています。この「シ」「ー」はおそらく「もし」の「し」であります。それゆえ、「シ」「ー」が文末におかれると、この一文の表現は、よりよいねいな、上位の表現になるのであります。文末詞「シ」「ー」の文終結効果は、大きいものがあります。

静岡県浜名湖近くの篠原村で聞いたことばには、

○コレデ イージャン。

これでいいじゃないか。 (老女)

があります。「イージャン」は、「いいじゃないか」を、よく思わせましょう。「ないか」の「な」[na]が「ン」[ɲ]になろうとすると同時に、「いか」はすがたを没してしまっています。右の文表現に、かくべつの文末詞は見えていません。文末詞ぬきの文表現ではありますが、「ジャン」の下部には、文末詞的効果がよく認められます。「ジャン」には、明らかに、つよい訴えの効果が認められましよう。私どもはここに、零記号文末詞の文終結機能を認めることができます。——この文をこの文として完成させている零記号文末詞のはたらきを認めることができます。

長野県北部の八坂村方言で聞いたものには、

○ソイカ。ソイカ。

そうだ。そうだ。

○エー、ソイカ。

ええ、そうです。

があります。これには、すぐに「カ」文末詞が認められます。特異な「カ」が、音声ゆたかにはた

らくので、このばあいは、この文末詞の文終結機能が、しごくあらわです。

「アノ ヨー。」といった文表現の頻用されることは、諸方言上によく聞かれましょう。東京弁の中でも、これを、よく耳にすることが出来ます。「あの」に「ヨー」をつけると、そこで、早くも一文が成立させられます。発音者は、「ヨー」を言えば、そこで完全に、一文表現の終結を意識します。「ヨ」はまったく、文終結の機能者であります。

「あすネ、早くネ、どうどうネ、何々ネ。」こうした言いかたがあつて、これに、人々が、上記のように、「」を打つていましょう。私は、右を、

○あすネ。早くネ。どうどうネ。何々ネ。

のように表記します。文末詞の出現は、文の終結を意味するからであります。

中国語について、いくつかの例を見ていきます。

○咱们休息休息 吧。

いっしょに休みましようね。

この例にあつて、「吧」の文終結機能は明らかです。何かについてよびかける時に、「吧」が出ます。「吧」は、まさによびかけの文末詞とも言いうるものでしょう。

○请坐 吧。

○请来 吧。

○好 吧。明天来 吧。

○请您随便坐 吧。

これらの例にあつても同様です。「吧」が、よく、文表現を終結させていましょう。「吧」は、使用率の高いものではないでしょうか。完熟した文末詞、文終結機能の明らかな要素がここにあると言つてもよいかと思われまます。

第四章 文末詞の意味作用

第一節 文表現の特定機能者

文表現の叙述構造を統一収約する機能者、文末特定要素（特定文末部）が、意味作用を發揮します。

それは、常識的な言いかたをすれば、「訴え・よびかけ」とも言えるものにほかなりません。

「意味作用」の表現は、もとより、文表現上のことであります。——意味作用との言いかたは、もつばら、文表現に関して、あるいは文表現論上で、おこなわれるべきものでありましょう。

第二節 文末詞（特定文末部）の発散する情意

——意味作用——

○コナイダ ネー ↓

このあいだね。

中年の二人の女性が話しあっていて、一方が他方に、右のように言つたとします。これは、これなりに、一種の情意を表現し得ていきましょう。

ところで、右の発言が、

○コナイダ ネー ↓

と言つたとします。文末の声調が、右のような抑揚であるばあいは、前のはちがつた情意が表明されたと見ることができましょう。

○コナイダ ネー。

とあるばあいは、また、発散する情意のちがいが認められます。

○コナイダ ネー。

とあれば、これはまた、人に、ちがつたおもむきの情意をとらえしめましょう。

「ネー」が「ネ」とあるばあいを見ます。

○コナイダ ネ。

とあると、これは、だれにも、「コナイダ ネ」とあるのとはちがった、情意の発散を認めしめましょう。純粹の「ネ」短呼ということはあり得なくて、「ネ」は、多少とも〔e〕母音の伸びた「ネ」になります。けれども、いちおう「ネ」と表記してもよさそうな聞こえのばあい、これはやはり、右に述べたようなことになります。いったい、「ね」を、「ネ」とも「ネー」とも書きあらわしてみたくなるのは、これもすなわち、私どもが、文末詞（特定文末部）の発散する情意に注意しているからではないでしょうか。

文末詞（特定文末部）の発散する情意については、関連資料として、大岡信氏の『折々のうた』の一つ（『朝日新聞』昭和六十二年十月十五日）を、ここに引用させていただきたく思います。

雨にさへ訪はれし仲の

月にさへなう 月によなう

閑吟集

室町歌謡。雨の夜でさえ訪れてくれた仲だったのに、今では月夜の晩にさえやって来てはく

れない、と嘆いているのである。心変わりした男へのうらみ言だが、表現としては「さへ」「なう」「よ」などの助詞でもっているといってもいいほどで、日本語表現におけるいわゆるテニヲハの働きがよくわかる。感動をこめた助詞のおかげで、文章としては完結していないのに分かるという性格が生じる。

大岡氏は、「表現としては『さへ』『なう』『よ』などの助詞でもっているといってもいいほどで、日本語表現におけるいわゆるテニヲハの働きがよくわかる。」と述べていられます。私はここで、「月にさへなう」、「月によなう」の、それぞれの「なう」のむすびを重視したいと思います。これが、私の言う文末詞（特定文末部）です。氏は、「感動をこめた助詞のおかげで、文章としては完結していないのに分かるという性格が生じる。」としていられます。「感動をこめた助詞のおかげで」というところを、「文末詞のおかげで」とあらためてみましょう。「文章としては完結していないのに分かる」という性格が生じる。」の「分かる」は、表現の情意がよくわかるということでもありません。——「完結していないのに」とも言われているくらいだからあります。（ところで、「なう」を文末詞のむすびと見るかぎりは、文章の完結も認めなくてはなりません。おおいに余意余情を残した、きれいな完結が、ここにありません。）

第三節 文末詞（特定文末部）の示す知的内容

——意味作用——

知的内容というものは、右に述べた「情意」以前の知的内容を言おうとするものであります。——
情意のカプセルに包まれる中みを言おうとするものであります。

「カ」という文末詞がありましょう。これの意味作用をたずねてみます。まず、

○ワカッタ カ。

わかったか？ (男教師↓小学生たち)

○ワカッタ カ。

わかったか？ (父おや↓子)

○ワカッタ カ。

わかったか？ (男青年↓小男)

○ワカッタ カ。

わかったか？ (男教師↓小学生たち)

のような言いかたがおこなわれていきましょう。これらの「カ」「カ」「カー」「カー」は、いずれも、

はつきりとした「問い」をあらわしています。この問いは、一種の知的内容にほかなりません。つぎにまた、

○アツ ソーカ。

あ、そうか。

○アー、ソーカー。

ああ、そうか。

のような言いかたがあります。これらのばあいには、「カ」「カー」が、問うてみずから納得する意——知的内容——をあらわしています。

こんどは、「ネ」のばあいを見ます。

○ワカッタ ネ。

わかったね？（教師が生徒に言って聞かせる。）

これは念おしの「ネ」であります。念をおすということは、一種の知的内容ではないでしょうか。

○イク ネ。

行く？

これは、相手に、やわらかくあるいはやさしく、「行く？」と問うものであります。問いたずねる知的内容がここにあります。

○イク　ネー↓

とあって、「ネー」が、おしつよい調子の発言であれば、これは、一種の命令表現にもなります。命令の意は、知的内容にほかなりません。

「ネー」への力の入れぐあいでは、これが、問いの表現にもなります。力の入れぐあい、音声の出しかげんひとつで、表現は微妙な変差を示します。

つぎの例は「テバ」です。

○ハヤク　シロツ　テバ。

早くしろつては。

この例だと、「と言えは」の気もち（むしろ命令の心）がよく出ています。「テバ」の有する内容を、知的内容と見ることは、ゆるされるのではないのでしょうか。

「ナモシ」という文末詞があります。

○マイニチ ヨー テル ナモシ。

毎日よく照りますねえ。 (老女↓中女)

というような地方弁の言いかたがあつたとします。発言者は、「ナモシ」と言いかけて、わりとまかに、相手の同意を求めています。言いかえれば、相手と共感しあいたいという気もちがよく出ています。同意を求めようとするのは、ただの情意発散にはとどまらないことではないでしょうか。

いずれにしても、文末詞(特定文末部)のはたらきに、醇乎とした情意発散にはとどまらないもののあることが明らかであります。それは、広義に解して、知的内容としてよいものかと思われず。

第四節 文末詞(特定文末部)のパトスの内実とロゴスの内実

文末詞(特定文末部)は、文表現上、叙述構造収約の機能者として、総合的な意味作用を発揮します。言いかえれば、この機能者は、意味作用上、パトスの内実とロゴスの内実とをカバーします。

○たたく ヨ。

○たたくゾ。

この二音をくらべてみます。「ヨ」と「ゾ」とは、それぞれ、自己のロゴス的内容を有してはいないでしょうか。「ゾ」は、そんざいな言いかたです。そのそんざいな気もちの表白には、相手に対する当方の、一定の対応心意が内在していきましょう。「ヨ」のばあいは、それとはちがった対応心意を蔵するものであります。対応心意が、ロゴス的内容を形成しています。さて、「ゾ」で言えば、これは、ばあいによつては、おしつよく荒つぽく言われ、ばあいによつては、やややさしみをこめても言われます。これらの時、表現者は、しぜんに、その情意・情感を表出しています。つまり、パトスの内実をのぞかせているわけであります。

○知りませんヨ。

○知りませんワ。

こうある時、「ワ」は、明らかに、女性用のものとされましょう。これに対して、「ヨ」は、おおいに男性用でもありうるものでしょう。右の二例によつて、「ヨ」と「ワ」をくらべますなら、同一事実の表現にあつての「ヨ」と「ワ」との、はたらきの開きがとらえやすく、したがつて、ここに、両者のロゴス的内実の差を知ることができます。——おのおのごとに、そのロゴス的内実の發揮に、パトスの内実の、膜としてはられることも、ただちに理解されることでありましょう。

「ロゴスの内実+パトスの内実」をとらえさせてくれやすい事例を、つぎにあげてみます。拙著『方言文末詞〈助詞〉の研究(上)』(春陽堂書店 昭和五十七年一月)のp.327には、つぎのようにしてあります。

薩摩半島域に、「ネ」を特別視する傾向がつよいようである。鹿児島市方面でも、人は、「ナ」をよいことばとし、「ネ」をわるいことば、あるいは目下へのことばとしてしている。

大隅地方にあつてもまた、同様の事態が認められる。東岸の内之浦では、「ネ」は目下に言う。〃などと言っている。〃おれになぜ「ネ」を言うかと、軽蔑を感じる。〃と、私に言ってくれた人もある。「ナ」と「ネ」との位相差が明瞭である。——とはいいながら、この地を調査したさい、子どもたちは、私に、ふつうに「ネ」をつかっていた。(カード検閲の識者は、この種の事実を示すカードに、これは鹿児島女子の「カライモ」普通語と注していられる。)

「ネ」ことばが、方言上、地方によつて、よいことばあるいはふつうのことばとされているかともうと、また、わるいことばともされています。このような全体的把握のうちには、いわゆるロゴスの内実とパトスの内実とを包括した識得が認められましょう。

別の話題です。「ノ」文末詞常用の中国方言のうちでは、由来、「ナ」文末詞は、なじみかねるものとされてきました。「ノ」の中に生まれそだった私自身、やがて「ナ」ことばの地に遊学して、「ノ」と「ナ」とに、それこそきつい相違を感じたのであります。「ノ」と「ナ」とについての、全体把握のちがいが、いかにも大きかったのです。

ここに、一つ、中国語の事例をとり出してみます。

○冷就加件衣服嘛。

寒かったら服をもう一枚着ればいいじゃありませんか（着たらいいじゃないですか）。

というのがあります。「嘛」は、文末詞と見て、「…………… 嘛。」と表記してよいものであります。この文例について、『中国語講座』の先生は、*「嘛は、道理から言つて、当然そうなるのだ、という意味をあらわします。」*と語られました。一方で、先生は、「嘛」を語気助詞とされましたが、「道理から言つて、当然そうなるのだ。」と言いうる内実を説かれたのは、「嘛」文末詞のロゴスの内実を説明されたものとも解されるかと思えます。

以上に述べた、文末詞（特定文末部）の総合的な意味作用を、私は、前引の拙著では、つぎのよ

うに述べています。

以上のような、「叙述即叙述構造」収約の機能者が、内容的にも、心情をのみ訴えるのにとどまるものではないことは、明らかであろう。さきに、第一章の第二節で、「知的要素と情的要素とのおのずから渾然一体となったものを全的に相手に訴えかける。」と述べたことを想起したい。その、全的な渾融体の中心流をなすものは、じつに、待遇意識であろうと思われる。対話のセンチンスは、その内実注目すれば、けっきょく、待遇意識の展開単位と見ることができぬ。(p.55)

第五節 文末詞の意味作用

文末詞は、文表現上、文末特定要素(特定文末部)となつてはたらし、その総合的な意味作用を發揮します。

その総合的な意味作用は、混融性の意味作用とも言うことができましょう。これはまた、ときに重層性の意味作用とも言うことができましょう。

その重層のさまに諸相があり得て、ものとはあいにより、あるいはパトスの内実が重なりさま

であり、あるいはロゴス的内実が重いありさまであります。

第五章 日本語文末詞の生成発展

第一節 史的考察

上述のような「機能と意味作用」の文末詞は、日本語にあつて、由来、よく生き、日本語とともによく生成発展してきました。

このことを追うために、今は一つ、「ヤ」文末詞を視材にしてみます。

「ヤ」は、本来、「叫び声」的なものではなかったでしょう。感声とも言つてもよいものだったかと思われまゝ。こういうものが、早くから国語史上に見えたのも、当然のことだったかと解されましよう。

大野晋氏・佐竹昭広氏・前田金五郎氏『岩波古語辞典』（昭和四十九年十二月）の「基本助詞解説」には、「ヤ」についての、「本来は掛け声であり、相手に向つて発する間投助詞であつた。」

との記述が見られます。

古文献について、『古事記』の例を見れば、

○美麻紀伊理毘古波夜。

というのがあります。「波夜」は、文末の訴えことばと見られています。このうちに「ヤ」があります。これはたしかに、感声的な訴えことばでありましょう。『日本書紀』の事例を見ると、

○而東南望之三歎曰吾孀者耶。

というのがあります。これの「者耶」のばあいは、「ハヤ」であつても、「ハ」の別置されることが明らかであります。——この事例にあつては、単独にはたらく「ヤ」文末詞のあつたことが、認められやすいでしょう。『播磨風土記』にも、「後得御病勅云葉者也。」とあります。

上代語辞典編修委員会編『時代別——上代編 国語大辞典』（三省堂 昭和四十二年十二月）の「や」[咄]（感動）の条を見ると、「②句の間に插まれるはやし詞。」とあつて、「石の上也布留の山の熊が爪也六爪ろかもし鹿が爪也」（琴歌譜）の事例が見えます。これの、たとえば「石の上也」とあるのも、私には、よびかけの表現と思われれます。すなわち、第一センテンスは「也」で完結し、「也」の「ヤ」は、訴えのはたらきの文末詞になつていてと考えられます。「布留の山の熊が爪也」もまた、一センテンスになつていてものと解されます。「ヤ」は「はやし詞」であつて、しかも、一

センテンスを言いまとめるものになっていないでしょうか。

万葉集の例を、さきの『岩波古語辞典』の「基本助詞解説」の「や」のところからお借りしてみます。

ほととぎす鳴く峰(を)の上の卯の花の厭(う)き事あれや君が来まさぬ(万一五〇一)とあります。「解説」には、これについての、「これは『君が来まさぬ「ハ」：厭きことあれや』の倒置である。」との説明が見えます。これにしたがえば、「や」の、文表現を結着する訴えことばであることが、いよいよ明らかであります。

一般には、上代にあっても、話しことばの中で、「ヤ」は、自在につかわれたことでありましょうか。

時代をくだってみます。

『枕草子』を見ましょう。稲賀敬二氏『枕草子』(尚学図書 昭和五十五年五月)の『枕草子』には、
今井源衛氏『大鏡』(尚学図書 昭和五十五年五月)の『枕草子』に

○女房「歌は歌ふや」

○中宮「さて、雪は、今日までありや」

などの事例が見えます。これらは、言わば目上の人から、そうではない人に問うことばになっています。ともあれ、会話での、問いの「ヤ」の、気やすい用いかたが見られましょう。今日の諸方言での、問いの「ヤ」におなじものがあります。

『源氏物語』を見ます。松尾聰氏の『註 源氏物語新講——夕顔・若紫——』（武蔵野書院 昭和三十一年九月）には、

○この西なる家には、何人なまびとの住むぞ。問ひききたりや。
との事例が見えます。これは、「源氏」が「惟光」に聞くことばです。

○隣の家々、あやしきシラノを賤男の声々、目さまして、「あはれ、いと寒しや。今年こそなりはひにも頼む所少く、田舎の通ひも思ひかけねば、いと心ほそけれ。北殿こそ、聞き給へや」というのもあります。これの会話のところは、「通釈」では、

「あゝとても寒いよ。今年は殊に家業にもあてが少く、田舎の行商もする気がないから、たいそう細かいことだ。北隣りさん。（私の言うことを）聞いてくださいよ。」

とされています。前後の二つの「や」が、「よ」とされています。会話での「や」が、まさに、文末訴えことばとして受けとられているわけでありましょう。このばあいは、あとの「や」など、明らかに目下とは言えない人へのことばづかいになっていましょう。前の「や」も、身分には関係があ

りますまい。

○「御供に人も侍はざりけり。不便なるわざかな」とて、睦じき下家司にて、殿にも仕う奉るものなりければ、参りよりて、「さるべき人召すべきにや」など申さすれど、

となると、これは、源氏という長上への問いの「や」になっています。源氏が目下のものにつかつた「や」の例は、

○「なほ持て来や。所に従ひてこそ」とて、
です。ここは命令の表現になっています。『源氏物語』にあつても、会話に「や」の出てくることは、めずらしくありません。

(以上の例は、すべて、「夕顔」にあるものです。)

つぎには、『蜻蛉日記』を見てみましょう。『日本古典文学大系』20(岩波書店 昭和三十二年十二月)の川口久雄氏『かげろふ日記』によります。会話に、しばしば「や」が出てきます。

○「男どんはまいりにたりや」などいひて、
などあります。歌に、

○とこなつに恋しきことやなぐさみんと君がかきほにをるとしらずや
とあります。地の文の思いがたりには、

○…………、いとつらきや。
があります。

○さきなるをのこどん、^(も)とう、うながせや」などおこなふ。

○「うちひきす^(す)ときくぞからかなるや」などいふをきくに、

これらは、また、会話の例です。つぎの情景はどうでしょう。

○いかゞ崎、^(まき)山吹の崎などいふところへ、みやりて、蘆のなかより漕ぎ行。まだ物たしかにもみえぬほどに、はるかなる櫂の^(か)をとして、心ほそくうたひくる舟あり。ゆきちがふほどに、「いづくのぞや」ととひたれば、「石山へ、人の御むかへに」とぞこたふなる。

ここに、作者のことば、「いづくのぞや」があります。女性も、このような問いかけをしたのでしようか。「ぞや」のことばづかいが、私どもにも、身にちかひものに思われます。(じつは、私は、^(も)この「や」を見て、やがて、『かげろふ』の「や」を広く見るようになったのでした。)『かげろふ』の世界に、現代諸方言にわたる「ヤ」の生活の、一つのふるさと見るような思いがします。

『かげろふ』について、「や」を考えるうえでの、好個の事例を、なお一つ、引用してみましよう。

あなかま、こゝになしとこたへよ。

との一文が見えます。この形であつて、なお、他には、

大夫の雑色ざしきの男おのこどん、なびすとてきはぐ(む)をきけば、やうやう酔よひすぎて、「あなかまや」
などいふ聲こゑきこゆる。

との表現が見えます。「や」が、自由につけそえられた文末特定成分であることは、明白でありましょう。「……………」や。「は、感嘆表現になつていふと言えましょう。他には、「あなかま〜」との言いかたも見えます。「あなかまや」での、「や」の特定性が、いよいよ明らかでありましょう。

くだつては、中世以降を見ましょう。ここでは、畏友佐々木峻氏の労作にしましたがわけていただきます。

氏に、「大蔵流古狂言虎明本における文末特定要素（文末詞）についての基礎的研究」、『方言研究叢書』第10巻 三弥井書店 昭和五十七年七月）があります。この論文の「一 虎明本狂言における、文末特定要素（文末詞概観）」には、

b ヤ行音文末詞

ヤ ゾヤ

ヤイ カヤイ ゾヤイ イヤイ ワヤイ ワイヤイ

ヤレ カナヤレ^も

ヨ イヨ ゾヨ ゾトヨ マデヨ カシラヌヨ ゾシラヌヨ

というのが見えます。これについて、私どもは、「ヤ」の通行を視ることが出来ます。

同論文の「三 諸他の文献との比較」から、なお、氏の労作を引用させていただきますよう。

実例の揭示は割愛し、当該事象の有無ということに重点を置いて、以下、箇条書ふうに整理してみる。

(1) 天草版平家物語は、同エソポ物語に比べて、ナ行音文末詞が多彩であるが、虎明本には遠く及ばない。「ナ」「ヤナ」「ヨナ」「ナウ」「ノ」「ヨノ」が認められる。〈以下略〉

(2) 閑吟集には、「ナ」「ヤナ」の他、虎明本に見られなかった「トナ」がある。また、「ナウ」「ヨナウ」「カナウ」「ゾイナウ」があり、虎明本に無い「ガナナウ」「カナウサテ」「トヨナウ」「ヨノ」などが見られる。〈以下略〉

(3) 大文典には、「ナ」「ヨナ」「ナウ」「ヤナウ」「ヨナウ」が見られる。虎明本に無いものでは、「ノ」の複合形「ヤノ」がある。〈以下略〉

(4) 『周易抄の国語学的研究』には、ナ行音文末詞と見られる例として、「ヤナ」の一形があるのみである。

『室町時代言語の研究』では、単純形の「ナ」のみであるが、『徳川時代言語の研究』と
なると、

ヤナ ヨナ カナ ガナ ナウ ワナウ ノ

など、虎明本に見えるものの他に、

イナ カイナ ワイナ ワイナウ ヤノ カイノ ゴイノ イノ トイノ ノイ

ノ ガノ ヤイノ ゴヤイノ

など、虎明本に無い多数の語形が見出される。その他、

ナア カイナア ゴイナア

などの「ナア」形の見られることも、注目に値する。

一方で、「ナ」「ゾナ」「ヤナウ」「ヨナウ」「カナウ」「ガナウ」「トナウ」「ヨノ」「カノ」「トノ」などが見えないのは、単なる偶然なのかどうか。

虎明本との如上の相違は、時代差ということと済むことなのか、或いは、その他の理由もあつたのかどうか。今後は、室町時代の文献を広く見渡して、それらの語形の有無を

確かめる必要がある。

佐々木氏は、むすんでこう説かれる。

虎明本に於ける文末詞の多彩さは、とりもなおさず、その対話性の顕著であることを証している。虎明本の本文に関して、固定化・改変ということが、しばしば問題にされる。文末詞に関して、虎清本と殆んど異文の存しないことを考え合せれば、虎明本の文末詞は、決して古典的・固定的なものではなく、当期に、まさに生きて働く姿を写したものだっただであらうと把握してみたいのである。

長い近世期に関しては、なお一つ、いわゆる切れ字の「や」のことを、述べそえてみましょう。

古池や蛙とびこむ水の音

とあるのでは、文章論的には、「古池や。」を一文表現と見ることができないのではないでしょうか。こう見たばあいの「や」は、詠嘆の文末特定要素とされるものであります。——ものは、文末詞とされましょう。

菜の花や月は東に日は西に

これにあっても、「菜の花や。」が、「や」止めの一文表現と考えられます。「切れ字」とは、よくも

言いあらわしたものと、私は考えたいのです。

夕立や家をめぐりてあひるなく

での「夕立や。」もまた、同様の「……… や。」表現であります。

これらの「や」は、人によびかけて、——たとえば老女が孫小男に、「一郎や。」と言うのにおなじようなものでありましょう。「や」は遊離独立の文成分であり、特定文末要素であります。ものは、よびかけ用の文末詞とされます。

人が、話しの途中で、〃何々や これこれや〃と列挙した時も、その「や」は、列挙で、「何々」
「これこれ」を言いさだめるものであり、そのもとは、表現上の心理的ポーズが、かならず存在
します。そのようなポーズによってささえられる「や」は、やはり、よびかけのものと解するこ
とができます。こうした「や」が、やはり、上乗の文末特定要素「ヤ」に通うもの（性分）を
示しています。

古来、同趣の「や」が、かなり自在に用いられてきています。「や」が、本来、叫びごえ的なもの、感声的なものであっただけに、これは、自由闊達な使用のまとなったのでしょう。文末の「ヤ」について、係助詞理解のたちばからの諸種の解釈がおこなわれましようとも、そのように解され

る「ヤ」が、現に、訴え作用・よびかけ作用のつよいものになっていることは、随時、認められるところであります。「ヤ」の始源的本性は、生きて永く保存されていると見るべきでありましょうか。

「ヤ」にはかぎらないことでもありますけれども、訴え作用の特定要素をなす感声的なものは、本来が叫びごえ的なものであったのにもふさわしく、それ自体が、一個独自の完結体のようであります。この点を凝視して、私は、「ヤ」なら「ヤ」を、「文表現的性格のもの」（この性格を、私は、旧来、「文的性格」と約言してきました。）とも規定してみます。文表現的性格のものであればこそ、ものは、どこへも自由に持ちあるかれ、さっそくに、文末に膠着せしめられてきたのもありません。以上、「ヤ」をとりたてて、一片の史的考察にしたいがいました。つきには、「ヤ」の歴史を、現代語界にたどりまします。

第二節 現代日本語方言状態上の「ヤ」文末詞

古典的な「ヤ」文末詞の世界を、通時的に観察してのち、現代日本語の方言状態に、「ヤ」の生態を見るにつけても、「ヤ」はなるほどこのようにも、今日、共時的によく生きているのかと、痛感さ

せられます。今日にあつて、「ヤ」文末詞は、口頭語世界の有力な文末詞です。

ことが現代事象であるだけに、私どもは、「ヤ」に関して、その用法の具体を精細に見ることができません。概括しますならば、「ヤ」に、よびかけの用法があり、感嘆の用法があり、問いの用法があり、命令の用法があり、誘いの用法があり、奨めの用法があり、推量の用法があり、願望の用法があり、依頼の用法があり、説明・表明の用法があります。また、受けひき（受けあつて自己に引きあてる）の用法があり、応答の用法があります。

これらは、単純に、「何」の用法との言いかたをしましたが、このかんたんな言いかたは、じつは、つぎのように述べられてしかるべきものであります。「命令の表現」について言うならば、こうです。——「文表現の末尾に立つて、その表現の全体を命令表現たらしめる、『ヤ』の機能」。かんたんには、つぎのように言うこともできましょうか。問いの用法の「ヤ」であれば、「問いの表現に役だつ『ヤ』」。また、「問いの表現の形成にあずかる『ヤ』」とも言いあらわすことができます。また、問いの表現を形成する『ヤ』と言いあらわすこともできます。さき

の拙著『方言文末詞〈文末助詞〉の研究（上）』では、p.591で、

「命令の『ヤ』は、命令の表現を完結させる強力効果の「ヤ」である。

との言いかたをしています。

現代諸方言上の「ヤ」は、総じて、非上品のものとなつています。——例外のあることは、言うまでもありません。古文献上の「ヤ」表現の事例に関しては、その表現品位の精細を追求することが不可能であります。それゆえにでもありませんか。さまで非上品みのつよいものは、見いだされにくいかのようにも感ぜられました。じつさい、そういう品位上のことは、どうあつたのでしょうか。

『日本古典文学大系本』九の『竹取物語 伊勢物語 大和物語』（岩波書店 昭和三十二年十月）の中で、『伊勢物語』の二二七を見ますと、

むかし、女をぬすみてなん行く道に、水のある所にて、「飲まんとや」と問ふに、うなづきければ、坏なども具せざりければ、手にむすびて食はす。率てのぼり（けり。おとこ、なくなり）に）ければ、もとの所にかへり行くに、かの水飲みしところにて、

大原やせかひの水をむすびつゝあくやと問ひし人はいづらは
といひて來にけり。（あ）はれ〜。

とあります。これの、「飲まんとや」の「や」は、どの程度の表現品位の「や」でありましょうか。もとより、この「や」は、頭注に示されているとおり、『飲まんとやする』の略」とされるものか

もしれません。そうであっても、本文のここは、現に「とや」のむすびでありますから、私どもは読者として、「や」によって言いきられている会話文と受けとることができます。のみか、受けとらざるを得ないのではないのでしょうか。本源は係助詞と見られるものが、本文の現実態では、かなり単純なよびかけことばの「や」になっているのであります。その表現品位は、このさい、男が盗んでつれていく女によびかけたことばとして見た時、かなりくつろいだ程度のものかと察せられます。しかし、本文の、あとに出てくる歌に見える「あくやと問ひし人は」とある「あくや」にいたっては、歌のことばの「や」として、品位はさまざま低くはないものと受けとらざるを得ないかもれません。大野晋氏が、「万葉集の助詞『や』について」(『文学』第五十六卷第六号 昭和六十三年六月)の中で、「(二) 文末に来るヤ」をとりあげていられます。その最後の引例歌は、

神なびの 山下とよみ 行く水に かはづ鳴くなる 秋といはむ鳥屋とや

(行く水にカハツが鳴いているのは、もう秋だといおうとするんだな?)

であります。氏は、「この歌の場合トヤは、つきかえす気持を表しているというほど強いものではなく、『きつと、もう秋だといおうとしているんだな』程度の意味と思われる。単純な問いかけである。』と言われます。単純な問いかけとされる「とや」は、もはや、感動表現に役だっているものとも言えるのではないのでしょうか。さて、この「とや」ないしは「や」が、どういう表現品位のものか

問わなくてはならないことになります。——さきの伊勢の「あくや」の「や」のばあいには、およそ等しなみのものが、ここにもあるのかと思われれます。

古文について、このようなたどりかたを試みますと、現代諸方言上の「ヤ」表現の大勢は、やはり、非上品本位のものと言わなくてはなりませんまい。

ここに一つの、おもしろい問題があります。現代諸方言上でのナ行音文末詞、これに属する「ナ」と「ノ」とでは、共通語感覚からは、後者よりも前者のほうが上品との受けとりかたがなされていましょう。だのに、ヤ行音文末詞の「ヤ」と「ヨ」との品位対応では、共通語感覚に生きる人の多くが、「ヨ」表現を、品等のより高いものと見るることかと察せられます。尾母音、〔a〕と〔o〕との対応という点で、ナ行音文末詞とヤ行音文末詞とのばあい、品位観が逆転するのは、まことにおもしろいことです。

現代日本語方言状態の趨勢からすれば、「ヤ」表現は、品位の向上をきたすことがなさそうであります。共通語人士の間にも、しばしば用いられがちの「何々しよう ヤ。」のばあいなどは、たいてい、人がややおどげぎみに、「ヤ」を用いているでしょう。「ヤ」は、あえて非上品表現（いわば下品表現）支持のものとされていましょう。

以下には、現代日本語方言共時態のうえにさかんな、「ヤ」表現生活の、ひとわたりの見かたをしてみます。

「ヤ」には、「ヤイ」「ヤン」の異形もあります。「ナ」に「ナイ」「ナン」があると同様であります。こうした、約束の異形とも言えるようなものさえも分岐しているところに、また、「ヤ」の流通の盛大がうかがわれます。

「ヤ」に関する複合形文末詞のことも、ここでとりあげてしかるべきでもあります。が、これは、文末詞の繁栄のだいたいな説明のために、のちの節をもつて特説することにしましょう。

九州では、南部の鹿児島県下に、南島域に関連する、注目すべき現象が見られます。大隅東岸の誘いの「ヤ」の例として、

○ゴハンヌ| イツシヨキ| タモンソ| ヤ。

ごはんをいっしょにたべましょうよ。

などをあげることができます。こうした「ヤ」は、けっして、下品な文表現の「ヤ」ではありません。まい。同地の、

○イカン| バッテン| ヨカ| ヤ。

“行かんでもいいですか。”

にしても、人は、この「ヤ」を、「カ」という調子よりはていねいな問い。と説明しています。また、念をおす問いかたで、目上または子がおやに言う。との説明もありました。鹿児島県下で注目される、こうした品位のものが、南島方面の同趣品位のものによくつながっています。

鹿児島県下を出はなれると、問いや誘いその他に「ヤ」のおこなわれることがいちじるしくて、その表現品位は、概して非上品のものとなっています。この態勢が、中国・四国へとつづいていきます。

さて、中国では、鳥取県下に特異な「ヤ」表現をあげておくこととしましょう。ここでは、「あるでしようよ。」というのも、「アルデシヨ₁ーヤ₁。」です。「……………でしようヤ₁(よ)。」の言いかたが、外来者の耳朶をうちます。

○オーウメダラー ヤー。

大梅だろうよ。(私が、この梅は大きいですね。とたずねたのに対する返事です。)のような、「……………だろうよ。」もあります。

四国、愛媛県下の、

○オットロシヤ。

やれ、おそろしや。

は、慣用の感嘆表現です。

近畿では、大阪府下の、

○シーヤしや。

しなさいよ。

○シトキヤしと。

しておきなさいよ。

などをあげておきます。やさしみを持った「ヤ」表現が特色です。

中部地方の愛知県下となると、

○タベリヤたべ。

おあがりなさいよ。

○ヒコーキガキタニミヤひこ。

飛行機がきたからお見よ。

となります。

関東地方での「ヤ」を、神奈川県下に見ます。問いの「ヤ」のばあい、

○ナンダヤなん。ヌシヤぬし。

「なに用か。おまえは。」

○オチャドーヤ。ヤッテイキナ。

お茶はどう？飲んでお行きよ。

などとあります。関東地方の東北部となつても、

○クレロヤ。

くれろよ。

などの言いかたがおこなわれていて、関東域に、いわば非上品の「ヤ」の流通が明らかです。

ところで、奥羽の福島県下となつては、命令の「ヤ」で、「ヨセヤ。」(よせよ。)、「シロヤ。」

(しろよ。)などがおこなわれていて、かつ、ていねいには、

○カマズ「ア」、オイ「ア」テク「ア」ダサイヤ。

かまわずに、そのままにしておいてくださいよ。

などの言いかたもなされています。秋田県下の男鹿半島で聞いたものには、

○オレノオカキョーイネク「ア」テヤ。

おれの女房はきょうはいなくてねえ(よお)。

があります。

北海道での一例は、

○アレ | ミレ | ヤ。

あれを見ろよ。

です。

用法の一般相を、このようにたどってきて、非上品表現の広汎な世界を想察し、ひるがえって、南島方面を見ます。沖繩本部那覇市の例には、

○ユービー | イツペー | ヒーサイ | ビータサ | ヤー。

昨夜はたいへん寒かったですね。

などがあります。奄美諸島の沖之永良部島の例は、

○ヒューヤ | ヒギルサ | アヤブン | ヤ。

きょうはさむうございますね。

などがあります。さきに、鹿児島県下を言うさいにふれたとおり、南島に、特異の「ヤ」があります。「ヤー」が、「ですな」と言いかえられるようなありさまなのでしょうか。

日本語の「ヤ」文末詞が、過去の長い歴史をへて、今日、南島方面に、上例のような形で輝いているのは、注目にあたいたいでしょう。

以上、全国状況の記述にあたっては、前引の拙著『方言文末詞（文末助詞）の研究（上）』から、諸所の事例を採択しました。

* * * * *

文末詞「ヤ」についても、私どもは、日本語文末詞の生成発展を確認することができます。

「ヤ」は、原生的な文末詞の者にすぎません。同類項のもの多数が、きそいあうがごとくに、日本語の歴史のうえに群生しています。文末詞の活動の、なんとさかんであることでしょうか。これは、日本語の文表現構造の本性にかかわることとは判断されるようでありますものの、現に、諸言語にぬきんでて、かく、文末詞の活動・繁栄がいちじるしいのは、まさに刮目すべきことであります。

次節・次々節では、なお、観点をかえて、日本語文末詞の繁栄を見ていきましょう。

第三節 日本語文末詞の繁栄

繁栄をいま言わしめる特定の事項に、文末詞転成と文末詞新生とがあります。

文末詞転成（転生）

ヤ行音その他の感声系の原生文末詞の、広域にわたる大発展があるうえに、なお諸系統の転成文末詞の大繁栄があります。

この繁栄は、日本語の文表現構造のもとにあつての、当然の傾向と見られるものでありましょう。諸系統の転成の事実が、いづれも、そうあつてしげんと、了得されるものであります。以下に、その実態を、分類しつつ述べてみましょう。

①まず、文表現にあつて、構造上、単語独自で文要素をなすものが、文末詞に転成しています。感動詞が文末詞になっています。「もし、ちよつて待つてください。」といったような文表現での感動詞「もし」が、文末にはたらく文末詞になっています。

○サイナラ モシ。

さようならね。

とあれば、これの「モシ」は、すなわち文末詞と見られるものであります。（これが、当文表現では、文末部という文要素、すなわち文成分になっています。）さて、こうした「モシ」が、文末詞として慣用されることがいちじるしくなつては、たとえば群馬県北部においてなど、その形が「ムシ」になっていきます。こうしたことは、ものの文末詞としての安定をいちじるしく示すものであります。よう。

副詞も、文構造上、一語単独で、文の直接成分となるものであります。したがって、これがまた、自由に文末にもとり用いられ、やがては文末詞とされています。「もう、おしまいにしよう。」というような「もう」があると、これは、

○ヤメロー モー。

やめないか！

のような言いかたにも用いられることとなります。こうした「モー」が、文末詞として定着してまいります。

人称代名詞の「わたし」や「あなた」、こうしたものも、文表現上、独自に一成分となつていきます。「わたし、します。」など。したがってまた、こういうものが、文末にも自由にとり用いられ、

やがては、そういうものが文末詞化します。「イヤ ワタシ。」(いやわたしは)などの言いかたがなされます。「ワタシ」は変じて「ワシ」「ワイ」のような言いかたになり、ついには、「バイ」にもなります。こうなつて、九州弁にいちじるしい「バイ」文末詞ができました。——これは、「わたし」系の、すなわち人代名詞自称系の文末詞ということになります。

名詞系の「こと」「や」「も」が文末詞化していることは、多く言うまでもないでしょう。「おみごとです コト。」のような言いかたは、もともと、「こと」を修飾するように、「おみごと」が言われたものでしょう。いつとはなく、「コト」が、文末でのやわらかな訴えことばになりました。

動詞も、しばしば、一語の一活用形が、文構造上、単独にはたられません。「早く ここへ 来い。」など。「来い」というようなものも、上乗の単独分子と同様、文末詞化せしめられてもよい運命のものにあります。動詞は、ことに、文表現末部に立つことが原則のもので、文末詞に転化せしめられやすいとも考えられましょう。「行こうよ。」とすすめることばが、

○イカ| コイ。

と、出雲方言下で表現されていて、「コイ」はもはや文末詞と見られるものになっています。動詞が助詞その他と結託したもの、たとえば「と思いなさい」が、「トモインサイ」などの形になったものも、文末詞になっています。広島弁では、

○キョーワ イカレン トモインサイ。

きょうは行かれないんですよ。

などの言いかたがなされています。

②文構造上、文末の成分をなすものは、文末詞化せしめられやすい運命のもとにあります。

右の動詞がすでにそういうものでした。——もつとも、動詞は、助動詞をともなつてはたらくこ

とも多いので、つねには、動詞が単独で文末成分をなすとは言うことができません。

助動詞は、動詞に随伴して、おおよそつねに、文末にたちはたります。(さらにその下に文末詞

もくることは、今、別にして考えると、右の言いかたは、ただに「つねに」とすることができません。)

東北弁の、

○ドコイ イク ダー。

どこへ行くんだい？

のような表現形態では、助動詞「ダ」が、文末詞化してはたらいっていると見ることができましよう。

——それゆえ上例では、「ダー」を分別して表記しました。関西弁のうちでも、たとえば岡山下

で、

○モー ヤメニ スル ジャー。

もうやめにしようよ。(もうやめにするんだな。)

のような言いかたがおこなわれています。「ジャー」が、文末詞ふうのものになろうとしています。

③文構造上、その成分の末部に立つ助詞が、やはり、自在に、文末詞化せしめられています。文構造末部の成分の末尾の助動詞が文末詞化せしめられるのにも似て、文構造上、中途その他の成分の末部の助詞もまた、文末詞化せしめられています。たとえば、「今日はいいお天気ですね。」「今日はご用はございませんか。」などの「今日は」が、あいさつことばとして「今日は。」と言われて、「は」が文末詞ふうのものともされています。私どもの言語生活に、助詞の使用のなんと多いことでしょうか。このため、多様多彩の助詞が、文末詞化せしめられています。電話でのことばには、「私

は山崎ですケド。」などというのがあります。なにも、「けれどケドも」などと言う必要はなさそう

なところで、人は、多少ともひかえるような気分でか、「ケド」と言っています。このような特定作用のやどされた「ケド」は、もはや、単純な逆接の「ケド」とはちがいます。文末詞の性格を持たしめられた「ケド」がここにあるとすることができましょう。人は、助詞を採っては、これを文末詞としても活用しているありさまです。

助詞系の文末詞の根づよい使用が、諸地方でさかんであります。先日はテレビで、つぎのことはづかいを聞くことができました。

○だめだ クサ。

これは、一人の中年男性が、自分のうまくやれなかったことを述懐して、頭をかくような気もちで、ことのあと、すぐに述べたことばでした。「クサ」は九州北部の方言に生きています。「こそは」からきたものでしょうか。共通語の表現に心を用いていた、右の九州人士も、思わず「クサ」と言ってしまったのです。

瀬戸内海中部にある大三島、その北端に、私の郷里があります。郷里方言での一つのことばづかに、

○ソリヤ ウツラカヤータ ナー。

それごらん、ひつくりかえしたじゃないの。(老女↓孫幼男)

というのがあります。これが、「……………じゃないの。」に相当する、相手を責めることばであることは、私にも、早くからよくわかっていたのですが、ナ行音文末詞を言わない郷里方言でのこの「ナー」は、何だろうか、これを私は、ついこのあいだまで疑問視してきました。ふと気づいたのです。この「ナー」は「のは」ではないのか、と。「のはだれか?」といったような句法でもあったのでしょうか。

以上①②③にわたって、現代日本語諸方言での、文末詞転成の道を見てきました。文末詞化の可

能性は、このとおり、整然としたものがあります。このことは、文末詞活動の旺盛を、合理的にものがたるものではないでしょうか。

考えてみますと、転成(転生)のあることは、まことに当然とされます。対話の文表現にあつては、相手への訴えかけがつねに緊要であるのにしたがつて、人は、その手段を求め、文末詞の世界をひろげてきました。ここに、文末詞形成の自在さがよく見られるという点であります。

この転成(転生)は、けつして、現代日本語にかぎつたことではありません。私どもは、国語史上の事実として、この事実を通観することができます。前引の、松尾聡氏の『註源氏物語新講—夕顔・若紫』に見ますと、つぎの事例をあげることができます。

『右近の君こそ。まづ物見給へ。中将殿こそ、これより渡り給ひぬれ。』(p.36)

これの通釈は、

童が急いで行つて、『右近の君様、何はさておき御覧なさいませ。中将さまがこゝを通つてお出かけなさいませ。』

となつています。松尾氏は、「右近の君こそ。」のところでは、「。」を打つていられます。——「こそ」は、文末のことばと見ていられます。通釈では、「右近の君様」の下に「。」が打たれています。が、こここの言いあらわしかたは、やはりよびかけのことばになっています。要するに、ここで、

私どもは、「こそ」という特定文末部を見とることができましようか。「こそ」は文末詞ふうのものになっていると解されましよう。——よびかけの「こそ」です。右の本のp.88には、

「……………。……………。北殿こそ聞き給へや。」など言ひかはすも聞こゆ。

との事例が見えます。ここの通釈の「北殿」の部分が、

北隣りさん、(私の言う事を)聞いて下さいよ。

とされています。「北隣りさん、」のよびかけとされている「北殿こそ、」の「こそ」は、よびかけの文末詞にちかくとりあつかわれているとされましようか。

「こそ」さえこのようであります。前に述べた「や」が、よびかけ用にもなっているのは、当然であります。

つぎには、前引、稻賀敬二氏の『枕草子』から事例をお借りしてみます。清女のことばに、

「かれ見給へ。かゝる見えぬ者のあめるは」

というのがあります。これの言いかえは、

「あれ御覧なさいよ。あんな普通見かけぬ男が来ているようよ。」

となっています。「あめるは」のところが、「来ているようよ」とされています。「よ」とされている「は」は、もはや文末詞ふうのものと見られているのでしよう。助詞「は」の文末詞転化というこ

とでしようか。なお一例をひきますなら、

中宮「なほ、例の人のやうに、これなかく言ひ笑ひそ。いと勤厚きんこうなる者を。」

というのがあります。これは、

中宮が「やはり、並みの人のように、生昌をなぶり者にしないように。まじめ一方の男なんだから」

と言いかえられています。「を」が、「なんだから」とされています。私どもは、ここに、「を」の文末詞化を認めることができましょう。——「を」のこうした用法は、よく見られるものではないでしようか。

つぎには、前引、川口久雄氏の『かげろふ日記』を見ます。

雨あめのあし、ををなじやうにて、ひとすほどもなりぬ。南みな面おもてに、このごろくる人あり。足をあしとすれば、さをにぞあなる。「あはれ、をかしくきたるは」と、わきたぎるころをばかたはららにををきて、うちいへば、としごろみしりたる人、むかひみて、「あはれ、これにまさりたる雨風あめかぜにも、いにしへは、人のさはりたまはざめりし物を」といふにつけてぞ、うちこぼるななだ涙なみだの、あつくてかゝるに、……

この文章が見られます。「をかしくきたるは」というのがあり、「……、人のさはりたまはざめり

し物を」というのがあります。

ひるがえって、一例、万葉の事例を見ましょう。前引、大野晋氏の論文に、「(三) 文中にある「ヤ」の条の、

うつそみの 人にある吾哉 明日よりは 二上山を 弟背と吾が見む (万葉一六五)
が見られます。この「人にある吾哉」の「哉」は、どういうものなのでしょう。大野氏は、

私一人が現世に生き残ってしまった人間であるという強い思いが、この「現世の人にある吾」を承けるヤにこめられている。

と説かれました。その、感懐の「ヤ」は、文末詞ふうのものになつてはいないでしょうか。私は、この歌が、表現構造上、前後の二文からなるとも見たいのであります。

文献をたどって国語史を考察しても、私どもは、その長い世代にわたって、転成(転生) 文末詞ふうのもの、広大な活動を認めることができるようであります。

ここで、あらためて、私は、転成(転生)の自在さを問題にします。このような自在世界には、言語主体の転成(転生)発想のおもしろさが認められるとされるのではないのでしょうか。日本人の独自の対話心理がはたらいっていると見ることも、できるのではないのでしょうか。そうした対話心理のくさくさは、私どもに、日本人の精神史を語らせるかもしれせん。

さて、その対話心理が、また、次節に述べる、文末詞の諸多の複合形を生ぜしめているのもあります。

文末詞新生

私が、従来、文末訴え音としてきたもの、これは、文末詞の新生を思わしめる(言わしめる)、あらわなものではないでしょうか。

文末訴え音については、拙著『方言文末詞（文末助詞）の研究（上）』で述べるところがありました。なかならず注目されるのは、「文末訴えア音」であります。方言の人は、文表現内容を相手がたに訴えかけようとして、表現のしめくりに、「ア」音を発し、これをもって、「相手の注意をひく結果となる」発言効果をあげようとしています。わかりやすい例は、奥羽方言内の、

○アノツ シア。

あのね。

のようなものであります。「あの」どの言いかけは、ほとんど万人に共通のものでありましょう。奥羽地方では、この言いかたをとる時に、末尾へ「シ」をおきがちです。「もし」からのもの)さてこの「シ」「エ」が、狭母音のもので、これとしては、聞こえの効果がよわいありさまです。人はし

ぜんに、〔i〕母音をひろげて〔a〕にしました。ここに、シア〔ia〕＜〔a〕の音形がおこりました。受けとり手は、〔w〕の広母音ゆえに、相手の訴えの大きさ・明確さを知得するしだいでありま
す。

こうした訴え「ア」音——〔a〕音効果——の利用・活用は、出雲方言の中にも認められます。今日も、その利用・活用のさかんなありさまは、つぎのとおりです。

○ツメタイデス　ネア。

つめたいですねえ。

これは、二十歳代の若い男性が、アナウンサーの「つめたいでしょう？」とのねぎらいのことばに答えたものです。田の中からのことばでした。この男性は、「メリット」などの洋語をもつかいながら、共通語での会話にとけこんでいるようでしたのに、ひとたび「ネ」の所にくると、その発言は、「ネア」となったのでした。若い人にも、「文末訴えア音」の習性が、深くしみこんでいるのでしよう。

私がこれまでに指摘してきた、特異な文末詞の一つに、感声的文末詞の「ダ」があります。〔方言文末詞（文末助詞）の研究（中）〕〔特異な文末詞「ダ」〕『言語の世界』第一巻第二号 昭和五十八年）四国東部域からはじまって、淡路南部をへ、紀州におよぶ範囲の中に、これがあります。四

国例をあげますならば、

○モミ アルンジャ ダー。

もみがあるんですよ。

などがあります。「もみがあるのだ。」と言いさだめておき、しかもこれを受けて「ダー」と言い、この訴えでもって、発言者は文表現をむすんでいます。この「ダ」が、指定断定助動詞の「ジャ」や「ダ」ではないことは明らかでしょう。

○ソーヤ ンダ。

そうだよ。

というのもあります。このさい、「ダ」は、「ンダ」とあります。「ダ」の前に「ン」があるのは、「ダ」の性質をよく示すものでありましょう。文末訴え用の「ダ」は、「ンダ」とも言われるような性質の発言要素であります。方言の人は、その日常の言語生活の中で、しぜんに、こうした発音にもなる「ダ」文末詞を産みだしたのでしょうか。ほかに語源を推想しがたいだけに、ここには、「ダ」文末詞の新生が言えるようであります。指定断定助動詞「ヤ」の常用される和歌山県下に例を見るならば、

○アタリマイヤ ダー。

あたりまえだよ。

のようながあります。「ワ」という文末詞に連合した「ワダ」もあります。

○カシノ コダ イツコモ ナイ ワダ。

菓子なんて、ちつともないわよ。

のような言いかたがされています。こういうのを聞いていて、私は、「ダ」はどんな「ダ」なのだろうといふかります。さしあたり、淵源が見つかるというようなものではないことが思われてくるのであります。

私が、早くから鹿児島県下で注視してきたものには、「ヲ」「モ」文末詞があります。これも、淵源・起源が不詳で、私には文末詞新生を思わせる好例とも見なされるのであります。早期に、耳にしめた著例は、

○ヒラキジン シャ ヲ。

ひらきき神社ですよ。

であります。薩摩半島南部の海岸で、一人の老翁と対話していた時、私は、開聞岳の麓に見えた鳥居を指さして、「あれはなんというお宮ですか？」とたずねたのです。それに対する老翁の答えが、右のものだったのです。こんなにはつきりとした「文末訴えことば」の「ヲ」を聞いて、私は、いかにも特異な訴えことばがあるものだなと、感じいったのでした。「オ」の形も見えて、たと

えば屋久島ことばなどでは、

○ヨカ| テンキチヤ| ナオ。

いい天気ですね。

とあります。他地域にも、「ナオ」はよく言われています。

「オ」とあつても、「ヲ」とあつても、私には、起源不詳の語であります。古語には感動の「ヲ」がありもしますけれども、薩隅方言下での「ヲ」の自在な使用ぶりは、そういう特定のものを思わせるようではなさそうです。やはり、土地が——方言風土がと言いましようか、こういうものを、しぜんに産みだしたのではないでしようか。

私が、与論島方言に関する問い聞きのさいに、早く聞きとめ得たものに、「ヤン」「ヒン」があります。

○ヒューヤ| ピーソー| ヤン。

きょうは寒いね。

といったような「ヤン」があり、

○ワーチャガ| ウブンチャヤー| イツチヨンヌイ| ヒン。

私たちのおじさんと行きあわなかつたかね。

といったような「ヒン」があります。「ヒン」は「ね」にあたるとの説明がありました。目下に対すると「ヒン」がつく。〴〵、「ヤン」がつくと、目上に対することばになる。〴〵ということでした。

私の調査は、昭和十七年十二月のことです。このせつ、町博光氏の教示を乞うたところ、氏は、「ヤン」と「ハン」なのではないかと言われました。与論島出身の町氏は、「ハン」と「ヒン」とが対応すると説かれました。

私としては、ヤ行音文末詞の「ヤ」にはまぎれない「ハン」のほうが、「ヤン」以上に注目すべきものと思われます。氏の説かれるとおりの対応二者、「ハン」と「ヒン」とが、そろって、新生の文末詞のように想察されるからであります。

高橋恵子氏の教示によれば、沖縄本島内の言いかたに、

○マーサ ミ ヒー。

おいしいネ。

○ドーシ ウトウチエーシヤ ルークル トウレーヒヤー。

自分で落としたのは自分で取れヒヤー。

などの言いかたがあります。(拙著『方言文末詞(文末助詞)の研究 (中)』の第六章) こうした「ヒー」や「ヒヤー」も、新生的なものではないでしょうか。

金田章宏氏の「山形県置賜方言述語に付属する指示接辞について」(『日本方言研究会 第三十九回研究発表会 発表原稿集』(昭和五十九年十月)には、

(2) 指示接辞には、コソアドのうちのコソアに対応する $-ko, -so, -ra$ および $-deko, -deso, -dera$ がある(方言の実態にしたがってコソラとよぶ)。ドに対応する形は存在しない。

とあって、

①Ezuno orenadadeko. (あれも私のだ)

④noraredeso. (のれるじゃない。)

⑤edadera. (ぐるじゃない。)

などの事例が見られます。

これらの「コ」「ソ」「ラ」は、やがて、文末詞的なものとも解しうるのではないでしょうか。――

――新生の文末詞かと受けとられることになりましょう。

が、一般に、純粹な新生を認めることは、容易ではありません。新生のようでも、転生の極端なものにほかならないことが、すくなくありません。

第四節 日本語文末詞の繁栄 つづき

繁栄を言わしめる特定事項に、なお、複合形文末詞の成立があります。現代日本語方言状態の全般に、複合形文末詞のおこなわれることが、まことにさかんであります。これをさかんならしめているのは、じつに、本然の文末詞要請にほかなりません。日本語表現の、会話の文表現生活では、だれしもつねに、文末特定の訴えことばに依拠するのがつねであります。

文末詞複合の方法は、多岐にわたります。しかし、根本的には、「感声系文末詞＋非感声系文末詞」の形式が、重きをなしています。ここには、本来的な文末詞とも言える感声系の文末詞世界の、しだいに拡充されてきた（されていく）ありさまが見とられます。

複合の結果、長形・長大形の文末詞ができます。感声系のナ行音文末詞の「ノ」がありますと、これが、おなじく感声系のヤ行音文末詞の「ヤ」と結合して、「ノーヤー」という複合形の文末詞ができます。これをもって、相手に訴えようとする時、人は、また、「ノーヤーアンタ」と言うようにもします。これが熟せば、この長大ものが一文末詞になります。

文末での訴えの強化は、しぜん、文末詞複合形の生産となってきます。拙著『方言文末詞（文末助詞）の研究』（上）・（中）・（下）の三巻について、おのおの巻末の方言事象索引をこらんにただければさいわいでありませう。これらでは、音別にわたって、複合形文末詞の諸相を見ていただくことができませう。「バナタ」はその一例です。これは、「バイ」と「アナタ」とから成っています。「タナ（一）チコ」「チコタナ」というのは、大分県内に認められるものです。「タナ」は、「あなたナ」でありませう。「チコ」は、「チコソ」「トコソ言へ」などと解されています。

「ナモシ」は世に有名でありませう。——「ナもし」の組みたてになっています。

瀬戸内海中部の島に育った私自身の特定の文末詞には、「ワイノヤー」があります。「私」系の「ワイ」文末詞に、「ノヤー」を結合させたものであります。己れを言って他によびかけるといった態のものでありませう。「ワイ」から「ノヤー」へのながれが、自己を主張して他の共感を求めるというしくみになっています。

阿蘇山南麓での調査のさいに受けとれた、長大形の文末詞を出してみませう。

○ホンニ ナーアタモーシ。

ほんとにねえあなた。

などというのがあります。女性ことばです。「ナー」のよびかけが、「あなた」の「アタ」に移り、なおこれが「モーシ」と言いおさめられています。(これ以上に徹底することは、むずかしいでありましょう。)「アタモーシ」が「アータモーシ」とも言いあらわされます。また、「ナアタモーシ」「ナアタモシ」とも言いあらわされます。

長野県南部のうちには、「ナム」という文末詞があり、「ナン(ム)ホイ」という文末詞もあります。後者の一例は、

○ソ₁ダ₂ ナ₁ン₂ホ₁イ。

そうですね。

です。同地方で、人の名の「むつ」をよんでは、「ムツ マーホ₁イ。」と言つてもいます。これらの言いかたは、今日、いちじるしくおとろえていることでありましょう。

関東に行つて、埼玉県西部の秩父市の事例を見ます。老女たちのことばに、「ムシアー」という文末詞が聞かれます。

○サン₁ニ₂ン₃キョ₁ー₂ダイ₃デ₄ ム₁シ₂アー。

三人兄弟でしてね。(老女↓藤原)

などとあります。「ムシアー」の内わけは、「も₁し₂ナ₃ア」でありましょう。秋田県南の矢島町に行き

ますと、「モシヨ」が聞かれます。「何々だ モシヨ。」のような言いかたがされています。「ンダ モシヨ。」は「何々ですねえ。」だとのことです。「モシヨ」は、「もし十ヨ」の複合形ではないでしょうか。

私に、一つの興味ぶかい事項があります。文末詞の複合形の長大なものは、どちらかというところ、国の西半地方に見いだされがちであるということです。複合形の長い文末詞をつくるのは、そのよくな思いかた、考えかたをすることでしょうか。そうした思いかた、考えかたが、国の西がわに片よっていちじるしい、と言えることになりましょうか。東国地方に行くと、複合形も、比較的簡潔な、「思いきりのよい思いかた」とも言ってみたいような文末詞が聞かれる、ということになっているのでしょうか。思考の粘着と短直とといったような類型差は、たしかに存在していることであらうでしょう。

複合形文末詞、あるいは長大形の文末詞について、一般的に論定しうることは、それらの形の下部に表現重点があるということです。「ナン（ム）ホイ」というのでは、「ホイ」が重点部になっていましょう。「ナーアタモーシ」では、「モーシ」のよびかけが、最終的に重要なものになっていると考えられます。文末詞の形態の長大化にに応じて、表現重点は下方に推移します。

方言界にあつて、人は、表現欲求に応じ、文末詞を累加してきました。——複合形文末詞を創作してきました。

しかしながら、人々は、文末詞運用の簡便を忘れません。元来、文表現の最後のしめくりことばが、あつかうのに不自由なほどに長いものであったりしては、特定のばあいのほかには、ふつごうでもありません。——（ものによつては、ふつごうなどは感じないで、その長いままを運用して、それで、文末詞の効果をよく發揮させていることでもありません。）

「ナー+モシ」は「ナモシ」とされました。これが、「ナンシ」や「ナツシ」などもされました。ついには「ナシ」ともされました。

「ナー・あなた」は、「ナータ」や「ナンタ」にされました。これが「ナタ」ともされました。

複合させても、それが、右のように、縮約形にもされます。しかしながら、このさいも、縮約は縮約、複合の精神は生きています。

文末重点をなす長大形文末詞が、文末本位に、縮約されるのは、当然のことでもありません。ましよう。

ところで、尾張方面の、「ナモシ」ならぬ「エモシ」は、「エモ」にされました。複合形の末端の「シ」が落とされています。

このばあい、「エモ」ことばは、「モ」によつて「モシ」を保有しているのでしょうか。

長形文末詞の下部重点をすてたというものではないと思われまふ。「モシ」の「シ」の尾母音は、「モ」の〔o〕母音よりも小さい〔i〕であります。「モシ」について、人々はしぜん、より小さな（聞こえのよわい）〔i〕母音の「シ」をすてたというわけでしょうか。

長形化が短形化をよんだとしても、——その短形化に諸相があるとしても、ここにだいじなのは、短形の諸相が、長形化を前提としているということでありまふ。

それにしても、文末詞の世界は、さまざまの生産方向を見せているものであります。そのすべてが、要するに、私どもに、文末詞の繁栄を考えさせまふ。

繁栄を可能ならしめるもの、それは、ひとえに、日本語表現法の本性というものにほかなりまふまい。

第五節 現代の文末抑揚

日本語文末詞の繁栄の一態として、現代の文末抑揚なるものもとりたてられますか。私は、このものが、やはり、文末詞繁栄の一証とされるのではないかと考えるものです。

文末詞のとり用いられる本場、口頭表現は、言うまでもなく、音声相をとるものであります。その中であつて、とくに、文末のことは調子が、今、注目されます。

例を、近江湖北の方言に借りましょう。「何々だケド」と言う時、人は、「……………ケド、」と言いかたをしがちです。「どうどうシテ」といふばあいにも、「……………テ、」と言われます。表現者は、話しをつづける文表現のうえで、話部の切れめの所（句読点相当の休止の前）で特異の上昇調子を見せるのであります。文表現の中ではありますが、こうしたことば調子の表示は、無意図的にもせよ、しぜんの訴えを示しているでしょう。人は、こうして、文表現の途中でも、相手への訴えかけ（よびかけ）をしているのです。これは、「きょうはあたたかいですネ。」といったようなばあいの「ネ」の訴えに該当するものでありましょう。極言するならば、「……………テ、」の言いかたを、表現者はすでに、一個の文表現相当のものにしてもいるのだと言えそうです。「何々ヤサカイ、」

(何々だから) のようなものにしても、人は、こう言った所で、ひと息つきます。ついているのは、「何々ヤサカイ」を、文表現なみに持ちだしているところではないでしょうか。じつさい、他の言いかたで、一中年男性が、おなじく中年の一女性に、バス中で、

○何々トモウトー。

何々と思うと。(と言って、いったん話しをとめる。)

のようにも言いました。「トー」で、センテンスはおわりです。このばあい、読点を打ってくぎつてもよいような言いかたが、きれいに文表現にされています。

文表現の末尾に、きわだたしい上昇調があつて、これがつよい訴えかけになっているばあいなどには、言うまでもなく、文末声調の文末訴えと認めることができます。例を、茨城県下の方言の中から借りてきます。県東北の多賀郡の一地で聞いたものには、

○モー サイナスツペー。

もう、さよならしましょうね。

のようながあります。当地方には、より低い音を単純に長く連続させて、末部あるいは末部ちかくで、一音を急に高く発音する習慣がつよいありさまです。無アクセントなどと言われるアクセント状況の地域に、これは、ありがちの傾向でありましょう。さて、上例で、「ペー」とあると、助動

詞「ペ」の言いかたが、かくべつつよい訴えことばになります。「ペー」の言いかたは、おのずから、訴え作用の文末抑揚になつていると見る事ができましょう。

共通語一般に、「わかりましたか。」などと言われ、質問文がとかく上げ調子におえられるのは、「か」の訴えことばを用いながらも、なお、質問意図を明確にしようと、そこに上げ調子を胎生させたものではないでしょうか。さきの茨城県下の一地のばあいにも、

○ソーデヤンシタツペ ニー。

そうだったでしょうねえ。(推しはかるばあい)

のような言いかたがされています。人は、文末詞「ニー」を用いたうえで、さらにそこへ、高音調、それまでの平音調から画然とはなれた高音調をつけ加えています。

現代とはかぎらないことですが、他時代はおき、現代で、文末詞の活動に該当するかと思われる文末抑揚の活動が認められます。それは、文末詞そのものにかぶさつてあらわれるへこのばあいは文末詞の活動を補強増強するゝことがあるとともに、文末詞ではないものが文表現末尾・末方にあるばあいにあらわれます。

このような傾向の発展とでも見られましょうか、文末以外の文中にも——文中のポーズ(句読点)

直前にも——同趣の抑揚が見られます。これを、文末抑揚に発展していく性質の抑揚と見ることができましょう。

第六節 文末詞の隆替

文末詞の繁栄の中に、栄枯・隆替もあります。新しいものができるとともに、存在するものの衰亡もあります。

鈴木規夫氏の『名古屋方言の語法』（土俗趣味社 昭和四年九月）には、つぎの記述が見えます。
(3) 「キョン」「ヨン」 敬讓の名詞をつくる「ソン」とともに残る土族語の代表的なものであるが、今は殆ど聞かれない。

ホー キョン さうかえ

読メル キョン 読めるかえ

マー イク ヨン、マツト ユツクラ シテ ゴゼアー もう行くつて、もつとゆつく

りしておいでな

なるほど、文末詞「キョン」や「ヨン」は、今日、通用のものではないのでありましょう。そう

いえば、尾張方言によく生きてきた「ナモ」なども、当今、若い年層の人たちには、おこなわれにくくなつてきているのではないでしょうか。「ナモシ」の松山で、今は、これがずいぶん聞かれなくなっているということです。

隆替は、中国語でも見られることでもありませんか。今の北京語の、「あ、ほんとだ。」の意の「真的。」にしても、これは、五十年くらい前には、あまりおこなわれなかったのではないのでしょうか。「的」の文末詞化が発展してきているのではないかと思われれます。別事ではありますが、旧時の私どもは、「吃了飯了么。」との言いかたを習いました。今日、北京語では、このことが、「吃飯了嗎。」と言われていきましょうか。(文字もちがいます。)

文末詞の繁栄といえば、これも、人々の表現生活上のことに相違ありません。表現生活にあつて人々が文表現を発する、そのさまざまの発揚にあつて、しぜんにとり用いられるのが文末詞であります。

表現は生活上のことです。生活は時代的なもの、歴史的なものであります。時の推移とともに生活は推移し、生活の推移とともに、文末詞表現の生活も変動を生じます。

将来はどうなるでしょうか。日本語の存するかぎり、将来ともに、文末詞表現の生活は、変動の

中にも、長く栄えるであります。文末詞なくしては、日本語に生きるものだけれども、自由な口頭表現にしたがうことができません。

ただし、口頭の共通語生活は別であります。共通を旨とする本質に依じて、口頭の共通語生活では、いわゆる文末詞の存立が、すでに^{ずいぶん}限られたものになっています。

それにしても、標準語樹立という見地では、その口頭語部門に関して、しかるべく文末詞を用意することが肝要となります。文末詞の標準語彙はどのようであつたらよいでしょうか。これが、研究問題になります。文末詞の繁栄と隆替とにかえりみつつ、私どもは、この考究にあたらなくてはなりません。

第六章 談話活動と文末詞

現代日本語の文末詞活動を、いわゆる談話についてみます。談話にあつてこそ、文末詞活動のしぜんさが、よくわかると言えましょう。

「談話語」との言いかたについては、すこしく考えさせられるものがあります。「口頭語」というのもそうですが、談話語——と言いきると、「漢語」などもおなじく、ものが静的にとらえられたかたちになります。そこが、私には、気がかりなのです。談話そのものは、まったく動的と言うのもおろかなものではないでしょうか。こういう点では、私は、世の談話語にかえて、むしろ「会話」の語をとりたいと思うのです。会話と言えば、これは、現場の活動をよくさすのではないのでしょうか。

方言の現場は、まさに会話の現場であります。たとえ一人が長ばなしをしても、相手があるかぎり、そこは、いきいきとした会話の現場であります。

談話——談話活動——は、文末詞または文末詞的なものをくさびにして、個々のセンテンスを順

置していく作業であると言えるのではないでしょうか。談話活動で、個々のセンテンスがつぎつぎにしたてていかれます。そのセンテンスの配置にあつて、文末詞がそこそのけじめとして活用されます。文末詞は、談話活動の、あるいは談話という段落での、かなめのような役割を演じています。

このゆえに、言えましよう。談話とともに、文末詞は、ますます繁栄の道をたどるであろう、と。談話の無限の生成に应じて、文末詞が無限に活用されます。

人間の会話にだいじなのは、文末詞であるということができましよう。会話での、対話のかんどころになるのが、文末詞であります。

文表現本位に文末詞を考えるのもだいじであります。それとともに、談話活動(↓連文)本位に文末詞を考えていくことも重要であります。談話活動の一態、二文の必然的連関という連文体にあつても、私どもは直下に、文末詞活動の重要性を認めることができます。必然的に連関する二文は、両文の呼応関係の明らかなものであります。その呼応関係を強力に支持するのが、双方の文末詞どうしであります。

人が談話活動にしたがつたばあい、広く言つて文章表現にしたがつたばあい、その前後二文の間に、必然的連関の認められないばあいはないであります。双方に、ゆるい関係しか認められないばあい

にも、そこには、そういう必然的連関の相があるとしなくてはなりません。

前後二文の關係のゆるいばあい、あるいは粗であるばあい、文末詞活動にもまた、何かの変わったところが見られましょう。そこでは、そこでなりに、文末詞活動での呼応の事実が認められるはずでです。

佐藤虎男氏教示の文例によつて、その間の事情を觀察してみましよう。

○ホソイ | カネデ | ナー | スルノガ | アンネヤ | ワー。

わずかなお金でね。するのがあるんだわ。 (青女↓母)

第一文の「ナー」と第二文の「ワー」とが呼応しています。単純につよく相手に言いかけていく「ナー」と、はつきりかつよく自己を言う「ワー」との対応索引で、前後二文はかっちりとしたものにとまとめられています。右の、二文からなる談話活動に、文末詞活動が顕著であります。つぎの例はどうでしょう。

○ソ_↓ソー。ソヤ ナ。ス_↓ンナテワ ユワ ヘン ナ。ソ_↓ンナ コト セン ヤテ コー ユー

そうそう。そうだね。「ス_↓ンナ。」とは言わないね。「ソ_↓ンナ コト セン。」なんて、こう言うね。 (老女)

文末の「ナ」が連続しています。これによつて、談話活動での、展叙の一態相が、よくあらわされ

ています。「ナ」が、この談話のすなおな展開を可能にしているわけであります。

談話について、文末詞の活動を見る時、「談話は、文末詞のふくよかな棲息地である。」とも言うことができます。談話の世界は、文末生存の沃野であります。そこに、文末詞の複合形も、おおいにおこつてよいわけでありましょう。

いわゆる談話語の研究が、今日の一つの重要研究問題になっています。

談話研究はむずかしい、と言うことができましょう。——ともすれば、談話研究が、常識論になつていきます。

談話構造を分析するといつても、これは容易なことではありません。談話構造が、人に無限に造出されるからであります。この中であつて、地域差などを求めることは、難中の難事であります。

どうすれば、談話の研究を、科学的なものにしていくことができるのでしょうか。

談話という活動態を、

表現態として見ること

構造態として見ること

この両方が必要でありましょう。この両種の処理の調和統合に成功した時、談話はやや科学的に処

理されたということになりましょうか。

右の二方向の調和統合をはかるためには、二方向にあいわたつた、肝心な着眼点を見つけることが肝要であります。私にしては、その「肝心な着眼点」が、じつに、談話上の文末詞であります。

私は、文表現論にあつても、表現態を全的に把握するポイントとして、文末詞をとりたてました。どのような表現論のばあいにも、——表現を表現としてとらえるといつても、ただ全的にとらえるというだけのことで、ことがすまされません。表現の実質にはいつていくことは、できません。そこに、表現論での、私の文末詞把握がありました。

談話という複雑な構造態・表現態も、要は、文表現の集積渾成にほかなりません。私は、談話(文章表現)のばあいにあつても、表現熟視のポイントは、やはり文末詞にあるとすることであります。これを除いて、他にどのような有力視点があるでしょうか。文末詞把握が、談話解析上の不可欠な手段になるとも、言うことができるのではないのでしょうか。

第七章 文末詞と諸外国語

第一節 「文末詞および文末詞的なもの」の世界

「訴え心意の普遍性」のことは、序章の第四節で述べました。

ここに、一定の言語があるとします。たとえば英語があります。それは、人々に用いられて、言語生活になります。いずれの言語の言語生活にあつても、生活の実際では、個々の文表現が表出されます。その文表現は、しよせん、対他の訴え性を本質とするものであります。——文表現が表出されおわたつた時、その完結体が、訴え性を發揮します。話しことばにあつてはもちろんのこと、書きことばにあつても、訴え性が言えます。さて、訴える時に、話しことば（口ことば）にあつては、訴え性を表徴する、なんらかの要素が出がちであります。すくなくとも、文末の声調といったような音声相があらわになるのは、ほとんど必然のことでありましょう。それに代表されるように——とも言いましょうか——、文表現一般にあつて（書きことばのばあいにも）、なんらかの訴え表徴

が、しばしば見られます。

「文末詞および文末詞的なもの」の、「文末詞的なもの」は、広く、世界の諸言語上に認められるのではないのでしょうか。(ありうるものが、考えられるのではないのでしょうか。)

私は、文表現の訴え性ゆえに、——「ここに□」ことばのうえでは——、いずれの言語にあっても、文表現の結末に、「文末詞的なもの」があつて当然かと考えるものであります。

第二節 ドイツ語のばあい

文末詞に関して、広島女学院大学の藤本正幸氏の教えてくださった諸文例はこうです。

○Es ist doch sehr schön hier, nicht wahr?

ここはとてもすばらしいですね。

○Herrliches Wetter, nicht wahr?

すばらしい天気ですね。

○Du kommst doch mit, nicht wahr?

君も来るんだらうね。

.....

○Das ist doch dein Bruder, nicht?

あれは君の兄弟だよね。

○Bald ist Neujahr, nicht?

もうすぐ正月だね。

○Bei deinen Berechnungen machst du manchmal Fehler, nicht?

君は時々計算間違いをしますね。

.....

○Das ist billig, ne?

これは安いよね。

○Das ist ja möglich, ne?

そうかもしれないよね。

○Kommen Sie mal wieder, ne?

またいらつしやいね。

.....

○Sie müssen früher aufstehen, ja?

早く起きることだね。

これらの例文は、『ドイツ語表現辞典』などからのものとのことでした。

これよりさき、氏の「指示を乞うた時」端的に言われたのは、「[nicht wahr]がおもなものではないですか。」というところがありました。

私としては、「[nicht wahr]に対して」「[nicht]のおこなわれているのが、興味ぶかく思われます。さらには「[ne] (nichtの俗語)のおこなわれているのが、いつそう興味おかく思われます。」

「[ja]」のことはおきます。今は、おもしろい「[ne]」について、すこしのことをつけそえてみます。マールブルクに十日間、滞在した時のことです。——第二回世界方言学者会議の時でした。私どもは、会の斡旋を受けて、民家、ワラウエルさんの家に寄宿することができました。経済学博士でもあるという、この初老婦人が、英語での朝夕の会話に、しきりに「……、ネ。」との言いかたをしたのです。私どもは、それを聞かされた時に、日本語の「ネ」を知っているのかな、というようなおどろきをおぼえました。この「ネ」こそは、じつに「ne」であったのかと、今ごろ領得するしだいでもあります。

「[nicht]」が、しだいに単純なものに考えられ、あるいは単純にあつかわれて、しだいにその語

形も変えられ、ついに「ne」になると、これは、やや感声的なものにもなったか。(あるいは、もつとも単純なつけそえことばにもなったか。)そこで、ワラウエル夫人のように、人は、英会話の中でも、これをわけなく流用してのけるようになっていくのか。

ということが、言えるのではないだろうか。

それにしても、藤本氏が表記せられたように、「ne」は、「・」のもとにあるのが注目されます。日本語の、「ぎのう ネ」などのように、「・」を必要としないものではありません。(もつとも、ワラウエル夫人の英会話での「ne」のばあい、その前のポーズが明瞭であったかどうかは、それこそ、私の記憶に定かではありません。——そんなにポーズらしいものはなかった発言も、かなりあったのではないかと回想してもおります。)

ドイツ語のばあい、日本語に群生している文末詞に類した文末詞とその群生とは、見られないとすることができましょう。日本語の文表現構造と、ドイツ語の文表現構造とに、差異・懸隔があります。

第三節 フランス語のばあい

広島大学の原野昇氏は、文末詞に関する私の種々の愚問に、多くの賢注を加えてくださいました。かつ、氏自身、文末詞的なものを追求せられて、その研究結果を私に与えられました。

氏の教えにしたがって、いくらかのことをしるしてみます。

○Faites attention aux grenades lacrymogènes, hein.

催涙弾に用心しろ。

(山崎耕一氏『ドキュメント「5月革命」』 第三書房 p.12)

感声的な「hein」が文末に立っています。日本語の文末詞にちかいものがここにあると、言えば言えないことでもないのでしょうか。しかしながら、ここは「, hein」とされています。それにしても、フランス語の会話表現にこういうものもあるのが、私には興味ぶかく思われます。

つぎに、「eh」という、やはり感声的な語があるようです。原野氏は、これを、文末に聞いたことがあるように思うと述べられました。

○Oh gaz?

「どきき。」「どきよ。」

「ga」が、本来、指示代名詞の「それ」とのことですが、上文では、「Ou」の「どき」の下に立ち
おだららつゝるまは。この「ga」の「ち」を「ち」と讀みかえられるところが、私の興味をよびま
す。

○Cela sera galant, oui.

粋なやつを作りたいんで、ええ。

(鈴木力衛氏訳「Molière, Le bourgeois gentilhomme」 p.50)

○C'était gentil, non ?

まあそれは親切な方ですね。

(「Le fr. et lavie. I.」 p.175)

「oui」を、「non」な眼で読む。「ち」とか「い」とかかいうものは、こうして文末に特用さ
れるものでもありあつてよいか。(私の普通の日常生活の中にも、「何々何々。はい。」といったようなこ
とだつたが、「ち」の「ち」と同じく「ち」が「ち」ときおり聞かれます。

○Vous buvez de l'alcool, je pense?

アルコールをお飲みになるんですよ。

〔Le fr. et lavie. 1.〕 p.233)

「, je pense」は、英語の文表現の「I think」「I believe」のようなものではないでしょうか。

原野氏は、このようなものもとりたててくだなりました。

○Donnez votre manteau, s'il vous plat.

あなたのコートをごちらによこしなさい。

〔Le fr. et lavie. 1.〕 p.15)

「s'il vous plat」も、文後尾に立てば、このように訳されてもよいはたらきのものになるのでしょうか。——ある慣用的なものが文末に立つと、それが特用成分になるということなのでしょう。これを私流に受けとりますと、その特用成分が、多少とも、文末詞的なものにちかひものになってくるか、ということになります。

以上、原野氏の、多くの教示例の中から、比較的、私にわかりやすいものを取りたててみました。

日本語の文末詞に比肩しうるものを、直下にとってくることがむずかしい点では、このフランス語のばあいも、英語のばあいによく似ているのではないのでしょうか。「訴え心意の普遍性」のまにまに、諸種の訴え方法がとられていきますものの、フランス語でのごうした世界は、なお、日本語での

文末詞群生の世界とは、おおいにちがったありさまでありましょう。

日本語での文表現構造と、フランス語の文表現構造とに、差異・懸隔があります。

第四節 英語のばあい

カナダ英語など、

○You are happy ei?

この言いかたもあるのびじょうか。この「ei」は「aren't you」にかかわるものと、私は、教えられたかと思えます。オーストラリアでは、「ei」が「oi」だのこともありましたか。「ei」なり「oi」なりは、もはや、感声的なものにもなっているのではないでしようか。いずれにしても、ここに、文末訴えの特定要素が見られます。「ei」や「oi」の直前に、「,」がいるのかどうか、不明なのであります。

草島時介氏の『なんでも試そう』（オリオン社 昭和三十九年）には、そのp.27が、

○I've only just arrived, muni!

ぼくはたったいまきたところなんだよ。

の事例が見えます。(拙著『方言文末詞(文末助詞)の研究 (上)』p.14) この「マン」(mun) がまた、「きもちが幾分感動した時に、話の後へ軽くつけるものだと言っていた。」そうです。右の拙著のp.15には、ハワイ英語の例もあげています。神鳥武彦氏が、現地でもらえられたものです。

○ You just arrived da tonari country, yahi

○ You go Haole movie tonight, yahi

などあります。この「ヤ」も、感声的な「yah」が見られます。

それにしても、「mun」や「yah」の直前には、「、」が表記されています。日本語の文表現とはちがった構造の英語の文表現では、文末に感声的なものがたちはたらいても、それは、「、」のもとに立つというものでしょうか。

昭和六十二年七月二日のNHKラジオ『続基礎英語』で、私が聞きとめたものに、つぎのセンテンスがあります。

○ I have no magazine here, though.

私は「これを聞きとった時」「though」にこのような文末詞的用法があるのかとおどろきました。「though」も「このように自由につかわれるのだな」と思いました。日本語で、電話のことに「も

しもし、わたしは山崎ですけど。」というふうな慣用文があります。接続助詞の「けど」が、このさ
い、かくべつ逆接を意味するものになっていません。日本語でのこの「けど」のばあいにも似て、
英語でも、「though」が文末に特用されているのでしょうか。ただ、日本語の「けど」の前には、何
のポーズもないのに対して、上の英文表現のばあいには、「・」のおかれることが必定です。

日本語の文末詞「ね」などに相当するものを、英語の文表現に求めるとなれば、通常（おおかた
は）例の tag question が持たなければいけません。

○It's very fine today, isn't it?

「ね」相当のものとはいいながら、「isn't it」は、「主・述」構造のものです。日本語の文末詞「ね」
とは、実態がおおいに異なります。

○Let's study English, shall we?

これへの「shall we」もまた、「主・述」構造のものでしょう。

文頭などにも用いられる「you know」や「you see」が、また、文尾にも用いられています。

「as you know」「as you see」が「you know」「you see」になったとすれば、このような省略
構造体は、すでに文表現上の特定分子になっているものともされましょうか。英文和訳で、人々は、
文末の「you know」などを、単純に「ね」と訳したりしています。ではありますが、「you know」

などのありようは、やはり「主・述」構造のものと言えましよう。

文末の「I think」「I believe」などがまた、似たようなものでありましよう。

私は、英語のこういう世界について、広島女学院大学の小川清氏に教示を乞いました。氏は、参考書も貸与せられて、多くのことを教示してくださいました。以下、氏の教示例・教示事項を引用させていただきます。

「I believe」は「I think」の類である。「I hear」「I suppose」があります。

なぜ「I must say」があるか。「so they say」があるか。「don't you think?」があります。これは「主・述」構造ではありません。

わたしの教示せられたものは「sort of」や「sad to say」があります。JAMES KIRKUP 氏の KOJI WATANABE 氏の著書『TRENDS AND TRADITIONS—Essays, Dialogues and Exercises—』（成美堂 昭和六十一年一月）の中で

○It means “Random Access Memory.” Information storage, sort of.

が見えます。また

○Yes. I rehearsed like mad. But I didn't win a prize, sad to say.

が見えます。「sad to say」のようなもの、上巻の文末特定要素にとりたてるとなったら、文末訴

え表現の世界は、いよいよ広まることになりましょう。

会話の中では、文末現末部のしめくりにあたっても、いろいろに自由なくふうのなされることが想像されます。そうした中に、たしかに、「ね」や「よ」などと訳してよいものがあります。

それにしても、文末特定要素の構造ということになりますれば、日本語の文末詞が、まったく単純な「ネ」や「ヨ」の単詞構造であるのに対して、英語では、とかく複雑構造のものであります。

ものはおおいにちがうとしなければなりません。英語の文表現構造と日本語の文表現構造とに、明らかな差異・懸隔があります。

第五節 インドネシア語のばあい

ジャカルタから来日して、広島大学に留学しているEdizal氏 (Center for Japanese Studies Universitas Nasional に勤めている人) の教示を得て、すこしのことをかかけてみます。《語序は転倒式です。》とありました。——日本語を理解しての発言でしょう。インドネシア語は、「助詞無、動詞活用無」だそうです。(私は、中国語もおなじだなあ。と、ふと思いました。)

「あまうは寒いすな。」というのを、インドネシア語ではどう言うのでしょうか。氏の答えはこうだ。

OHARI INI DINGIN, BUKAN?

日 これ ー | ー

きょう 寒い ね

「ネー、いすな。」だ、

OBEGITU, BUKAN?

「そう」 ね

ださうです。日本語「BUKAN」が注目されます。

ところで、「わたしは知りませえわ。」にあたるセンテンスを書いてもらおうとすると、「わ」に相当するものはないとのことでした。つぎのセンテンスが得られました。

OSAYA TIDAK MENGENGI

私 ない 分かる

これは、英語のセンテンス構造とおなじになっています。しかし、前の「HARI INI」の「あまう」は、ことかわじた野郎です。

つきだ、これはあなたの本ですか。」の「か」を、私は問題にしました。ところが、「か」相当のものもなご。とのことでした。つぎのセンテンスが与えられました。

OAPAKAH INI BUKU ANDA?

か これ 本 あなた

この「APAKAH」は「what」「is」の説明が与えられました。

ちなみに、文の抑揚は、一般に、平調主体だと言えます。たとえば「ありがとうと言います。」も、

OTERIMA KASIH (おたが TERIMA KASIH)

のようだ発言された。

インマネシマ語が「転倒式」であることを説明してくださった事例には、つぎのものがあります。

SAYA MAKAN NASI

1 2 3

私は御飯を食べる

1 3 2

なるほど、語順は英語とおなじ。で、「S-P-O」形式が見られます。

ついで、

あなたの本 BUKU ANDA

2 1 1 2

新しい家 RUMAH BARU

2 1 1 2

どうも適合められませんでした。おれの「HARI INI」も、これと同類のものではない。こうした野倒式は、英語のなまらとは異なります。

さらなる転倒式のはなはだしなか、この言語の特性になつてくるのではないか。そうした言語はおれの「BUKAN」が見えます。

おい、Edizalは「HOW TO MASTER INDONESIAN LANGUAGE」を説くおつてんだおつて、この中で、私が問題とする文末詞に類するものが、三つだけあると言われました。それは「BUKAN」の「YA」の「YABUKAN」のちがひだ。井とつておひたつておれは「BUKAN」の「YA」の「YABUKAN」のちがひだ。この「井とつておい、Edizalは、おこなわれる頻度を、

BUKAN 90%

YA 99%

とられました。この説明のしかたには、わかりかねるものがありますけれども、「YA」のほいかに

へたじなむたぬじやが、じじい明のなびありまじや。

「あやなを難なもつせな。」な、

OBESOK ADA RAPAT, BUKAN?

OBESOK ADA RAPAT, YA.

と聞かれます。「YA」のほうに、聞かぬおもむきのものだそうです。(マクセントもそうなつてゐるじやうか)「BUKAN」のほうに、おもむいたやうな聞かただなるじやうです。それ、「？」もしひらかれてゐるじやうか。マクセントも——聞かす。

「BUKAN」は、か「YA」の方なもじで強調。

この説明もあつきました。「YA」が、を(さやうと)てゐる。この説明もあつきました。

早く話す時は、「BUKAN」は、か「KAN」が、へ出る。このもあつきました。インドネシア語では敬語はない。そうです。

ふたつたつて、「BUKAN」「YA」とも、敬語のものともありません。「BUKAN」は、何なのてじやうか。「これは本ではありませぬ。」の意のヤンヤンが、「INI BUKAN BUKU」などのじやうです。この「BUKAN」は、否定の意味として、はたしてゐるのだそうです。

なまだかかびた「YABUKAN」は、を、早く話すの中、 「YA KAN」ともなるじやうです。

(話す時は一つにつづけるが、二つのことば、三つのことばをした。)

インドネシア語だ、文末特定のことばは、「BUKAN」と「YA」を認めることができましようか。「YABUKAN」をとりたてて、ものを三つとかぎえても、これは極少の数です。特別のものが、特用されているのでしょうか。(それにしても、こうしたことは産みだされなくてはすまなかつたところに、私どもは、諸言語を通じての、言語上の一普遍的性質とも言えるものを認めることができましようか。)

Edizal氏は、上の三つを言われた時、他の友人に聞いても、これぐらいです。ともつけそえられました。いわゆる転倒式のインドネシア語には、日本語に見られるような文末詞簇生は、見られないということなのでしょう。

第六節 タイ語のばあい

タイ語については、ウィーラワンさんから、いくらか教えてもらうことができました。この人は、現在、広島大学に留学している女性です。——華僑出身のことです。

タイ語の語順は「S↓V↓O」で、英語とおなじだ。ということでした。「私は家を持っています。」は、「私は・持つ」(持っています)・家を。」となるのだそうです。活用はない。とのことでした。活用しない。一つのことばが一つ。中国語とおなじ。変化させることができない。ともありました。

語順の説明のため、つぎのセンテンスが用いられました。

○赤い花がたくさん咲いている。

これをタイ語で書きあらわせば、つぎのようになるということです。

sonit ya man da
花 色 赤 咲く たくさん

(「咲いている」の時も、右のどよい。とのことでした。)

私は、文末詞を問題にして、つぎの二つの文例をあげました。

○きようは寒いですネ。

○わたしは知らないワ(ワヨ)。

これらを、タイ語ではどう言いますか、とたずねたのです。答えはこうでした。

○ムク トー ナムク ナ

田 今 瀬い ね

○チャン ムイ ヌー ローク ナ

わたし ない 虫ら わ ヤ

タイ語では、センテンスのおわりにも、いわゆる句点はつけないのだそうです。私がつけたのに対しても、ウィーラワンさんは、それを否定しました。

右の二例を教えられた時、私は、たとえば、「ね」の「ナ」など、タイ語にも、文末詞と言えそうなものがあるなと思いました。右の二文とも、文末に「ナ」を持っています。（これは、タイ語で、「E」と表記されるのだそうです。さて、日本語の「ワ」とされた、タイ語の「ローク」というのは、どういうものなのでしょうか。）

後日また、ウィーラワンさんが、自分でしらべてきてくれました。その書きものには、ウィーラワンさんが、「文末詞の見られるもの」とする十一の例が書かれていました。それらを、つぎに掲出してみます。（タイ語の文字は特別なもので、ここでは、その表記をはぶくことにします。――印刷上のことを考えました。）

1 ローく ナ

瀬い ナ

(この「ナ」は、^ノ相手を賛成させるもの。だとのことでした。この文の発音抑揚は、「ロ
ン」^ノ「ナ」のように聞かれました。)

2 ノネ ノネ ノネ

抑へ E

(このセンテンスの発音抑揚は、「レオ レオ シー」というようなものでした。)

3 スン タン ロック

不定形(ない) (問に合う) だろ

(「ロック」の「だろ」は、「ね・よ」にあたらない。とのことでした。この文の発音抑
揚は、「^ノマイ タン ^ノロック」のようなものでした。)

4 ノー チャー

お父さん ねえ

(この、「ねえ」にあたる「チャー」は、^ノ動物にでもいい。とのことでした。「チャー」
は、^ノよぶはあ、よびかけ。だそうです。やわらかい、かわいい感じ。だそうです。

さて、この文の発音抑揚は、^ノつぎのようでした。「^ノポー チャー」

5 ナー エンズ ナイン

おれだ ぞ

「エンズ」は「自身」だとのこと。この文の抑揚は、つぎのとおりでした。「カー」エ
ンズ、ウオイ」「ウオイ」は、怒る感じ。で、「私はよお！」といったようなことにな
るそうです。

6 クン エン

あなたね

（これは、「あなたあなた、ちょっと聞いて下さい。」という感じ。とのことです。「クン
エン」

7 チャイン レオ ラ

そう な(だ) の

（答えるばあい、説明のばあいとのこと。男女がこう言うとのこと。ウイーラワン
のんは、右の「ラ」を、中国語の「ア」だと説明されました。「チャイン、レオ、ラ」

8 ポム チャエフ タナカ クラツツ

ぼく 名まえ 田中 です

（発音の明細は、上來、すべて省略しています。単純なカタカナ書き一遍にとどめておりま

す。「ボム」() チュア タナカ クラップ」() さて、この文にも、文末詞または文末詞的なものは見えます。が、これが示されました。女性のばあいは、「デイチャン」() チュア タナカ「カカ」と言われるそうです。()

9

ムネ カネ チャン フ
否定形 (わかる) へ
ない わから

「フ」は、男女ともつかうけれども、ていねいではない。したい間のことば。とのことです。「フ」のかわりに「ヤ」もきます。これは女だけのものとのことです。「フ・ヤ」は、命令にはつかわな。とのことです。発音抑揚は、つぎのようでした。「ムネ カネ チャン フ」()

10

パン カン タ チャ
行き ましょう ね

「パン カン タ チャ」()

11

パン カン タ ナ
行き ましょう ね

文末詞的なもの、あるいは、文末詞相当のものが出てきているのが、みな、短文のばあいです。こうした、特定の表現のばあいに、何か特定詞が、文末に出てきているのでしょうか。会話表現一般のばあいが、わかりかねます。ウィーラワンさんは、これらの文末詞的なもの（文末詞相当のもの）について、

会話だけ。短い文につける。

と言われました。別に、*「長かつたらよくない。短いのがすなおな文章。」*とのことばもありました。会話文一般に、「短いのがすなおな文章。」なかどうか、ここではわかりかねます。

ウィーラワンさんは、以上の事例を示されたうえで、*「考えてみると、（文末詞は）多くない。」*と言われました。——日本語の文末詞についての私の説明は、かねてよく理解していてくれたのです。（日本語での会話がよくできるウィーラワンさんのことです。）

文構造が、*「英語とおなじ。」*とも言われるタイ語でのことです。簡潔な特定表現のばあいを除いては、一般に、——日本語流には、文末詞的なものは出にくいのでしょうか。

第七節 アラビア語のばあい

アラビア語については、広島大学に留学しているアハマド氏（カイロ大学日本語科卒）から、ものを聞くことができました。

アラビア語の語順としては、

V→S→O

S→V→O

が指摘されました。〃方言では後者のほうが多い。〃とのことでした。

日本語の、「ぎょうは暑いですネ。」「ほくは知らないヨ。」「いいサ。」のような言いかたを、アラビア語では、どのように言いあらわすのでしょうか。「ほくは知らないヨ。」の「ヨ」についても、アハマド氏は、（——すでに日本語の知識が豊富で）、〃「ヨ」と言うばあいにも）いろいろなばあいがある。〃と言えるくらいなのですが、さてアラビア語ではとなると、「ヨ」相当のものは、示されませんでした。〃「ヨ」にあたることばはない。〃ともありました。〃言いかたのニュアンス（音声表現）によって、「ヨ」相当のものをあらわしている。〃ともありました。〃かたちにあたるものはない

が、表現のしかたはある。”ともありません。このあと、私は、

「ヨ」「ヤ」「ネ」にあたる形態素はない。が、文表現では、それらにあたるもの、それらによつてあらわされるものを、他の諸方法で言いあらわしている。

と断言しています。

アハマド氏は、

アラビア語に、英語の「is'ti:it」相当のものもある。

と言われました。それは、

KAZALIKLA LAISA A

というのだそうです。

アラビア語に、日本語の「ネ」「ヨ」「サ」などにあたるものはないようです。英語的語順の中では、そうしたものが、あり得ていないのでしょうか。

第八節 蒙古語のばあい

私が、はじめて蒙古語に接したのは、昭和十年ごろのことです。広島文理科大学国語国文学研究室の助手になった私は、さいわい、廊下を歩いて向かいがわの東洋史学研究室の戸田茂喜助手さんに、ものを教えてもらうことができました。戸田さんは、当時、すでに、蒙古語に通じていられたようです。“日本語と、語順はおなじだ。”というわけで、戸田さんは、手をとるようになして、私に、蒙古語を教えてくださいました。なるほどそうなのかと、私も、語順のおなじであることを、実感したことでした。

(当時、また、朝鮮語をかじることにもやや熱をあげたことは、のちに述べます。)

昭和十年代の中ごろちかくなりますと、私は、内蒙古からの留学生二君に接することができました。これが、なまの蒙古語にふれた最初です。

当時、学会に、日本語系統論、あるいは日本語成立論がさかんになってきたことは、今もよく思いかえされます。そういう時流の中であつたからでありましょう。私ごときも、アルタイ語系といつたものに、目を向けようとしたのでした。

そのごのことは、何も、しるすことはありません。短期の情熱で、蒙古語は、どこかへ消えさったのでした。近来、文末詞なるものを、諸言語上の、あるいは言語学上の、一大好テーマではないかと考えるようになって、心はまた、アルタイ系諸言語にも向いてきました。

ところで、二・三の蒙古語文法書にふれてみましても、どうも、文末詞めいたものがつかめません。——蒙古語（モンゴル語）の「カタカナ」も知らない私が、何もとらえ得ぬのは、まったく当然のことではありますが。広島で、モンゴル語について、ものごとを教えてもらおうとしても、現状では、にわかにはことがかえません。勉強は、すべてあきらめるほかはありませんでした。最近、思いきつて開いてみたのが、小沢重男氏編『モンゴル語会話練習帳』（大学書林 昭和三十九年九月）です。

私は、会話文例の中に、「か」とか「ね」とか「よ」とかにおわる文例を求めて、この本のp2からp4までを閲覧しました。

見ますと、「か」におわる文例が夥多です。それに反して、「ね」や「よ」の文例は、ごく少ないのです。(p41までに、「ね」の文例は、おそらく一つでしょう。「よ」の文例もまた一つでしょう。)ここに、私の感じたことがあります。会話練習帳に、どうしてこのように、「………ね。」や「………よ。」の文例がすくないのだろうかということですが、これが、わりと、多くの会話練習帳に見られる

現象だとしたら、これは、一つの考えものだと思われれます。

ともあれ、第一には、多数を制する「か」の文例をおつけしました。まったくわからないでいるものが、あたまから機械的な処理を試みます。

どちらへお出かけですか。

Та хаа явж байна?

というが出ています。また、

税関はどこですか。

Гаднын хороо хаа байна

というが出ています。これらのばあい、問いの「か」にあたるものが、蒙古語ではどういふ表現要素なのか、私によくわかりません。「か」に関して、こういう事例が相当に多く見つかります。

ところで、「か」らしいものが、比較的推察のつけやすい形で出てくることも、多いありさまです。それを、いく種かにわけることができます。——まったくの機械的処理です。

一つに、

新編発の列車はどのプラットフォームにきますか。

Нийгата-гас ирэх тэрэг элhin та-уанд орох уу?

とらうのが見られます。この種のものが多く出てきます。

二つ目は、

これは不関直通列車ですか。

ЭНЭ БОЛ ШИМОНОСЭКИ ХҮРТЭЛ ШУУД ЯВАХ ТЭРЭГ ҮҮ ?
のやうなのが見られます。この例文が、上引の实例の直下にあるものですが、文末語は「ҮҮ」の
やうだといふです。「ҮҮ」の例はそんなに多くありません。「今支払うのですか。」は「ОАО
ОХОН ТӨЛӨХ ҮҮ ?」のやうだといふです。が、「受取をください。」のはあともまた「Г
аса/бар өгнө үү。」のやうだといふです。

三つ目は、

汽車はどのへらの間には停車しますか。

ГАНТ ТЭРЭГ ХЭДИЙ ХИР УДААН ЭНД ЗОГСОХ ВЭ ?

のようなのがあります。文末は「ВЭ」が見られます。これの出ている例文が、かなりあります。

四つ目は、「ЮҮ」の出ている大例が見られます。

英語で書いた時間表がありますか。

АНГЛИ ХЭЛЭЭР БИЧСЭН ЦАГИЙН ХУВИАР БИЙ НЮҮ ?

座席があるでしょうか。

СУЛАВА ДИНИ ТОУ ?

五つだけ「ТОМ」の出てくる二例が見られます。

この箱には何が入っていますか。

ЭНЭ ХАЙРВАЛТ НОУ БАЙГАА ТОМ ?

以上、問いの「か」の出てくる例文はこの二つの観察でした。

つまり「ね」の文例を見ます。

飛行機が施回してきますね。

НИСЭХ ОНГОЦ ЭРЭЖ БАЙНА.

とこの「ね」があります。これは「ね」相当のものが、モンゴル語でどうなっているのでしょうか。

つまり「ち」の例です。

ちとち着陸するのびちち。

ЁСТОЙ Л ГАЗАР БУУХ БИЭ АЭЭ.

とあります。「ち」にあたるものは「АЭЭ」なのびちちうかどうでしょうか。

蒙古語に、文末詞の成立ないし繁栄は、どうなっているのかと考えさせられます。服部四郎氏は、『蒙古語とその言語』（湯川弘文社 昭和十八年四月）で、

文を構成する成分の排列順序は日本語のそれに酷似している。

と述べていられます。「主語は述語に先行するのが普通である（略）。」「修飾語は被修飾語に先行するのが普通である。」「複文においても同様で、主語節は主語と、修飾節は修飾語と同じ位置を占める。」「蒙古文語の打消の助詞が動詞に先行する点は、現代日本語と趣を異にする。」とも述べていられます。

「日本語のそれに酷似している」とされる蒙古語に、日本語でのような文末詞の繁栄が、見られるのでしょうかでしょうか。

やはり、日本語と同語順と言われる朝鮮語に、日本語流の文末詞がさまで多くは見られず、したがって、文末詞の繁栄などは言いにくいことであるらしいのと、蒙古語の文表現法を思いあわせますのに、蒙古語の文末は、はたしてどういふありさまなのかと、対比の興味は深まるばかりです。

第九節 朝鮮語のばあい

朝鮮語にあつての文末詞の存立は、日本語の比ではなく、すくないようです。

はじめ、私が朝鮮語に接したのは、やはり昭和十年ごろのことでした。留學生の某君（じつはその名も失念しているありさまです。）から、私は、ほんのすこしばかり、朝鮮語の手ほどきを受けました。君が直下に発言したことは、

朝鮮語と日本語とはよく似ている。朝鮮語の「カ」は、日本語の「カ」にまったくおなじだ。ということでした。

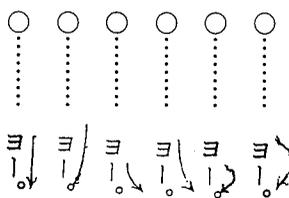
ふしぎなことに、「カ」のことだけは忘れないで、思いつづけてきました。

このごろになつて、ときおり、NHKラジオの『ハングル講座』を聞くと、やたらにといつてもよいほどに、文末の「ヨ」が聞こえてきます。私は、あらためて、「ヨ」をおっかけるようになりました。

『ハングル講座』で、個々の対話文に、文末の「ヨ」がよく出てきます。（これにくらべれば、「カ」はあまり出てこないほうだとも言えますしどうか。）「ヨ」は、男性女性の発言に頻発するといつてよ

いかと思います。これに類似のはたらきものが、今、別には、私に見あたりません。

「ヨ」の出でくるイントネーション、くわしくは文末声調というのを見ます。



といったありさまです。——これ以外には、文末声調のありようがないでしょう。こういったありさまをとって、「ヨ」は頻出します。これら総体を受けとった時、私どもは、ここに、「ヨ」の明確な訴え性をくみとらざるを得ません。「ヨ」が文末詞であろうとなかろうと、ここには、「ヨ」での訴え」の厳然と存立していることが、明白なのであります。

抑揚論的にも、ここで、私どもは、「文末訴え抑揚」というものを認めることができます。

この「ヨ」が、青山秀夫氏松尾勇氏著『实用朝鮮語会話』（大学書林 昭和五十六年三月）ではどうなっているかを、私は、見とおしました。

ます' この本にも' 問の「か」の文例が多く出ていました。(p.3からp.56までを通覧してのこと
です。) (朝鮮語は「Kia」も使っています。日本語どおりの発音ではありません。)

○お食事すまされましたか。

식사 하셨습니다이까?

[iks'a haj'su'umnik'a

なむびと。この種のものの多例を挙げておいて、問の「か」の「o」があります。これは「o」(io)
にほかなりません。

○爽々もお元気ですか。

무인께지도 안녕하세요?

puink'escdo annjghasejo

なむとあひます。

ところで、敬なひあひの「か」の文にも、「o」(o)のむすびが見えます。

○ああ、そうですね。

아, 그러세요?

なえ。

それぞれの文の「か」もあります。——ただしこれも、問いの一種と見ることもできましょう。

○さあ、今日は外で食事をしましょうか。

자, 오늘은 우리 밖에서 식사할까요?

やはり「お」が出てきます。

いつか、NHKテレビの「ハンゲル講座」を聞いていましたら、「お」についての説明があり、

これを文尾につければ、ていねいな言いかたになる。

とありました。そして、「お」が、「ね」と訳されました。こうしたところには、「お」の文末詞らしさが認められるようでもあります。

このおは、『美用朝鮮語会話』だとして、日本語文、「……ね。」とあるところを見ましょう。こういうような実例が出てきます。

○少し前まで日がさしていたのには今はくもっていますね。

조금전까지 해가 비치더니 지금은 날씨가 흐렸습니다.

○いや、これは私の探している会社ではないですね。

아니, 이것은 제가 찾는 회사가 아닌데요.

諸例みな「ね」のところが「☆」とあります。「お」の訴え機能は、歴然としたものなのでしょう。

か。

つぎだ、日本語文の「よ」でおわるものを見ます。とりあえず、つぎの二例が見られます。

○これは注文しませんでしたよ。

이것은 주문하지 않았는데요.

○そして市内にも多いですよ。

그리고 시내에도 많습니다.

第二例には「FO」が見られません。

以上、しめくくりますと、文末の「FO」が、じつによく見られるということになりました。私どもが、『ハングル講座』を聞いていても、なるほど、「ヨ」(ヨー)がよく聞こえるはずです。その一々が、日本語の文末声調にも似た、いかにも訴えの明らかな声調で発言されています。「FO」は、たしかに訴え要素なのだと思われれます。

しかし、韓国から来日した学友(広島大学留学生)二氏は、かならずしもすぐには、「FO」を文末詞としてはくれません。金潤喆氏は、のちにかかげますように、「日本語のような完全な文末詞」を指摘してくれながらも、その中へは、「FO」を入れていません。安秉杰氏は、

○하도 어려우니까 공부할 생각이
 とても 難かしいので 勉強する 気が
 안나지요.
 しないんですよ

この例文について、最後の「☆」を、「敬語をあらわす文末詞」としながらも、やがてまた、これを文末詞としてとりわけすることに、首をかきあげてしまったのでした。「切りはなしていいか。切りはなしてはならないか。」についての判断が、定まりませんでした。

○나도 잘 타이니 노힘이 먼저 가지지요.
 私も 行く (つもりだ) から 老兄が 先に いらっしやいよ

という例文についても、最後の「F」を分立させることには、否定的だったようです。(安氏には、つぎのことばがありました。F₀ [io] の前に敬語の語幹が来ると、その F₀ [io] を離して考えることはできません。)

右の二例文は、石原六三氏青山秀夫氏共編の『朝鮮語の学習』(養徳社 昭和三十七年十月)からのものです。

ちなみに、『朝鮮語の学習』の「感嘆詞」の条には、「ㅁ」が見えていません。

それにしても、私が聞きとった、

○ㅁㄴㄹㅁ ㅁー。

だめですよ。

○………ㅁㅁㅁㅁㅁ ㅁー。

私ですけど。

○………ㅁㄴㄹㅁ ㅁ。

回々するそうです。

などでは、「ㅁ」がとりはなせるのではないのでしょうか。聞いた現場でも、「ㅁ」のはたらきどまが、いかにも「文末詞のはたらき」と思われるものでした。第三例の「ㅁ」については、ていねいな表現になる。との説明がありました。——「ㅁ」が、そういう特定のはたらきを示すということなのでしょう。

日本語と同語順とされる朝鮮語に、どのようにか、文末詞があるにちがいないのではないのか、との思いよりで、私は、留学生のかたたちに、検討を請うたのでした。金潤喆氏は、ご自身、熱心

な考究を進められ、結果を、私のため、一枚のプリントにしてくださいました。

金氏は言われます。「韓国語の文末詞は、文法書にはない。」と。さて、プリントでは、「①日本語のような不完全な文末詞、②動詞の語幹につく文末詞、③体言につく文末詞」との分類を示され、①

②③のおののじき、実例とせられるものをあげてくださったのです。

①日本語のもうな不完全な文末詞とされたのは、左記のとおりのものです。

①雨がたくさん降りますすね。
비가 많이 옵니다 그려.

①その人が帰りますすね。

그 사람이 돌아갑니다 그려.

①東京には私も行くよ。

(토요코) 동경에는 나도 간다요.

①これは百万円もするぞ。

이것은 백만엔이나 한다요.

①あの人はいつもそうなのよ。

그 사람은 언제나 그렇다니까.

①彼は人の言うことを聞かないんだから。

그 사람은 남의 말을 듣지 않아요.

ちかごろ、私は、広島大学の、留学生の研究室で、新進の朝鮮語学者、深見兼孝氏に会うことができました。氏は、右の諸例を見られ、かならずしも、これを肯定せられるようではありませんでした。氏とたのしんだ会話の中で、私は、つぎのように、有意義な教示を受けることができました。まず、文末詞的なものをあげるとすれば、

그대

네

‘そうですね’

그

‘そうですね’

があげられようか、と言われたのです。「그」については、保留の意を示されました。三者とも、「終結語尾の後に来る要素。語幹には接続しない。」ものようです。

つぎに、深見氏は言われたのです。「文末詞でなくとも、いろいろなムードをあらわすものが豊富だ。」語尾に密着して不離の、文末詞的方向のものが、だんだんある。」

氏は、さらに言われました。「文末詞的關係の研究はこれからというところ。」「文末で独立する要素がありはするが、すくない。」「文末に離れて立つものが、一方では、語尾に付着している。」「文末詞的であり、文末詞成立の方向のものであって、かつ、いつも付着不分離のものがある。」

私としては、「ヨ」(FO)がこれだけ頻用されていて、その「文末訴え」が明らかであるのに、これについての、文末詞として独立的なものとする見かたが、すこしも成立していないのが、ふしぎに思われます。日本語では、非文末詞も、たとえば「もし」や「あなた」「わたし」が、しだいに、文末詞としても転成せしめられています。転成とともに、それが、分명한文末詞になっています。このような文末詞成立事情が、朝鮮語にはないのでしょうか。

文末詞上、日本語と朝鮮語とに、その成立・簇生の大きな差異があるとしたら、これは、語族のいちじるしいちがいがいということにもなりましょう。双方は、同系の言語ではあつたとしても、言語類型には、相当の差異があるとも言えることになりましょうか。

同系を考える上の必要条件、語順に関しても、一つ、考えてみます。朝鮮語では、日本語の、「タバコは喫みません。」が、「タバコは喫まナイマス。」のように言われているそうです。つまり、「ナイ」否定辞と「マス」敬語法要素とが、日本語での逆になっています。双方同一語順と

言われている中で、こんなこともある朝鮮語に、文末詞の成立のしかたも、おおいに、日本語のとは相違したものがあるらしいのを、私は、興味ぶかく思います。

第十節 中国語のばあい

中国語、文構造（——語順——）は英語に似ていて、日本語にも似ている。“などと言われる中国語、これについて、文末詞の問題は、どのように整理せられるのでしょうか。”

私は、漢字言語の中国語の、会話表現に、漢字表記も明確な文末詞が、たしかに成立していると見ます。以下、初心の私が、「文末詞としてのはたらきの認められるもの」としたいものを、項目で列挙していきます。

各項内の挙例では、しばしば、NHKテレビ『中国語講座』から、文例をお借りします。記してここに謝意を表します。

一 吗

○行嗎？

よろしいですか？

○干嗎？

どうしてなの？

○好嗎？

いいですか？

○好一点儿了嗎？

すこしよくなりましたか？

○这个車去北京飯店嗎？

この車は北京飯店に行きますか？

○你能数清一共有多少房子嗎？

きみ全部でいくつ建物があるか数えきれるか？

嗎がつけられて、疑問文がつくられています。単純質問に、これがよく用いられるようです。

○給我吧。

私に下さい。

○请看吧。

どうぞご覧ください。

○请吃吧。

どうぞおあがりください。

○你先走吧。

あなたお先に。

○请用普通話說吧。

どうぞ普通語で話してください。

○那、我們開始吧。

では、私たちははじめましょう。

○好、那咱們开飯吧。

さあ、それじゃ食事にしましょう。

○这是「煎饼」吧？

これ「おせんべい」でしょ？

○你累了吧。

つかれたでしょう。

○对吧？

そうですね？

諸用法があるようです。「请、请吧。」とか「请吧。请吧。」とか、吧は、ごく、むぞうさにつかわれているありさまでしょうか。

三 呢

○你呖？

あなたは？

○在哪儿见好呢？

どこで会えばいいですか？

○你問我啊、我問誰呢？

きみがほくに聞くんなら、ほくは誰に聞こうかね？

○据说过去这三层屋頂的顏色都不同呢。

話によると、昔はこの三重の屋根の色はみな同じじゃなかったんだ。

○盖儿还没摘呢。

ふた（写真機の）がまだとつていませんよ。

やはり、諸用法が認められます。相談を持ちかける時にも、よくつかわれるでしょうか。

四 啊

○是啊。

ああそうですか。〈受けひき〉（抑揚） 是啊。↓

そうだよ（ですよ）。（抑揚） 是啊。↓

○你吃得真快啊。

たべることが早いのね。

○在哪儿？ 我怎么看不见啊？

どこにあるの？ わたしどうして見えないの？

○看见了。那么小啊。

見えたわ。あんなに小さいの。

やはり、諸用法が認められます。簡潔文のばあいは、ことに、文末声調（抑揚の文末部分）が、くつきりと、その独自の訴えぶりを示します。

五 嘛

○咬！ 别一个劲儿往上跑了、等我一下嘛！

ねえ。一気に駆けのぼらないで、私をちょっと待ってよ。

○离这儿远嘛。

ここから遠いじゃないか。

「嘛」は、当然をあらわすことです。——「きまりきってるじゃないの！」、「もともときまりてるじゃないの！」といったようなばあいに、これがおこなわれているふうです。

六 哪

これの例で、私が最初にだれかから教えられた例は、つぎのものです。

○現在東北更冷哪。

今、東北はさらに寒いですよ。

この訳も、教えられたものです。

そのあと、「哪」の例を得ることがすくなかったので、私は、友人の姜国昌氏に、「哪」の例を質問しました。以下は、姜氏の教えによってしるします。

第一に、「哪」は感嘆文のおわりにきて、感動・賛美などの語気をあらわすとのことです。「哪」は「啊」とおなじだそうです。「啊」の音が転ずるのだそうです。例はこうです。

○多么美哪！

なんと美しいことか！

第二に、「哪」は、疑問をあらわすそうです。——相手の答えを、どうかと待っているような語気をあらわすとのことです。「呢」とおなじだ、ともありました。例は、つぎのものです。

○你到哪儿去哪？

あなたはどこへ行きますか？

七 呀

これについても、私がとらえた例はわずかです。

○真美呀！

ほんとに美しいなあ！

○貴呀？

高いんだろう？（ねだん）

などがあります。

「呀」が、感嘆や疑問につかわれています。

講座のテキストには、

○你在这儿胡说什么呀！

こんなところで何を出まかせ言ってるの！

というのなどが見られます。

さきの姜氏は、「呀」について、「よくつかう。」と言われました。——感嘆文によくつかうともありません。

○你到哪儿去呀？

あなたはどこへ行きますか。

のような例も示されました。

八了

私は、これが、一つのだいたいな文末詞ではないかと考えるものです。講座でも、「文末の助詞」との説明の聞かれたことがあります。その時、「了」のはたらきについて、「一般的にそうになっていることをあらわす。」との説明がありました。「そういう状況になっていることをあらわす。」との説明もありました。

○我三十三岁了。

私は三十三歳になりました。

○明白了。

わかりました。(わかった。)

○知道了。

わかりました。

○噢、看見了。

あ、見えた。

たまたまのこと、講座本に、右の最後の例が見えて、「了」は、はなして印刷されていました。私としては、こうあって、「了」が、文末詞らしくてよいと思うのです。

「……………そうなっている」ことをあらわす点では、「了」に、完了を意識することが容易でありましょう。この意味では、日本語流に言って、「了」を、助動詞系の文末詞としうるかもしれません。ところで、かんたんな「対了。」のようなものになりますと「そうだわ。」の意のばあいなど、かならずしも、これを、「……………そうなっている」とか「完了」とかまでは言わなくてもよいかのようには思われます。

○好了。好了。

わかった。わかった。

というような語気のばあいなどでも、「いいよ。いいよ。」といったような気分のことも、あるのではないのでしょうか。抑揚としても、「好了。」のばあいがあり、また、「好了。」のばあいもあります。

○太好了。

すばらしいわ。

というのがあります。

○太謝々你了。

ほんとうにありがとう。

とのばあいにも、「了」が、文末詞としてよくおちついているのではないのでしょうか。

たまたまテレビで聞いたことばに、

○去好了。

というのがありました。娘さんが、他の娘さんを見おくることばでした。抑揚は、「去好了。」でした。

○走了。

は、私が、北京での遠足のおりに聞いたことばです。「帰りましょう。」というのでした。中国語の学者の説明に、「軽い命令」というのもありました。

○怎么了？

どうしたの？

これは疑問文になります。

九 的

私がつとも問題視していますのは、この文末詞です。

「的」には、準体助詞その他の、大切な用法があるらしく、「的」は、私ごときには、齒も立たないほどの大問題対象です。が、今はあえて、「的」に文末詞用法を見とろうとしているのです。

テレビの中国語講座も、その気になって、とくに「的」に注意してきました。さいわい、私のとぼしい経験での一度だけ（昭和六十二年九月二日）、講師の、この「的」は、表現を断定的に言う文末の助詞ですね。と言われるのを聞いたことがあります。例は、「是的。是的。」（そうです。そうです。）でした。

別の機会に、「不要紧 的。」（大丈夫です。）が出ました。この「的」について、「文末の助詞です。」との説明がありました。

以前からの聞きおぼえのことばに、「快々の」「慢々の」というのがあります。「早く行け。」とか「ゆっくり行け。」とかいうものでありましょう。これらの「的」が、すでに、私の言う文末詞を認めしめるものではないでしょうか。

○好的。

これが、「的」文末詞の存立を、認めさせる、いちばん、わかりやすい例ではないかと、私は考えるのです。テレビ劇では、

○好。好的。

といったようなのが、わりによく聞かれました。応諾のことばでしょう。それが、このような二文になっているので、第二文での「的」文末詞がことに明らかであろうかと思えます。北京内で、「好的。」について、「的」は文末の語気詞だ。との説明を聞くことができました。こうであれば、ものははや、私の言おうとする文末詞でもあります。

「好的。」の例を、なお見ていきましょう。やはりテレビ劇でのことです。初老の男性が中年の婦人に、「清坐。」と言いました。すると、婦人は、「好的。」と答えました。つぎの例は、中年の医者

○好的。

です。これは、看護婦さんへの応諾のことばでした。

「真的。」の時も、「的」の文末詞らしさが明らかだと思えます。

○噢 真的。

(おやほんと!)と言っておどろく。

というぐあいです。

○真的?

ほんとかい?

(中年男性)

などともありました。

テレビでは、

○是的。

という抑揚(低平調)の応答も聞くことができました。——初老の男性が中年の男性に言ったものです。

○真的! 謝々你。

というのがあります。

やや長い文の一例はこれです。

○你什麼時候从日本回来的？

あなたはいつ日本から帰ってきたのですか？

この「的」も、対話の現実では、文末詞ふうになつていようかと思われまゝ。似たような、

○我从日本来的。

私は日本から来たのです。

もあります。

一つのことをつけそえてみましょう。「的」は、日本流に言うところ「ダ」で、「^(a)」の音がひびきまゝす。「了」も、日本流に言うところ「ラ」で、これまた「^(b)」の音がひびきまゝす。ともに、相手への訴えかけの明瞭音が出ている、とも考えられまゝしょうか。

十 您

感謝のことばに、

○谢々您。

というのがあります。「谢々」を通常とするところに、「您」を文末においた言いかたもあるという

わけです。「謝々。」のおこなわれることがいちじるしいので、私は、はじめて「謝々悠。」を聞いた時、「悠」を、まことにつけそえことばらしいものと思いました。この「悠」を、思いきって、日本語流の代名詞系文末詞ととってみることはできないものでしょうか。

よりにくいには、つぎの言いかたもなされています。

○大謝々悠。

こうある時、「悠」は、何々のつけそえことばではないでしょうか。いずれにしても、「悠」がつねに「悠」の調子で発言されるので、私どもは、これを特定の表現要素と思いとりにやすいのです。

ともあれ、「悠」を、右のような位置においたところには、文末詞論上、はなはだ注目すべきものがあります。主部に立つ「悠」と、文末部に立つ「悠」とでは、位格がちがうと言わなくてはなりません。

日本語では、「いいフ。」の「フ」など、「私」系の語が、形のはなはだしい変貌をきたして、文末に立ちました。それが、まごうかたなき文末詞となりました。

中国語は、意字の漢字の言語です。文表現では、この意字がつづられるので、これを見たばあい、一字一字の独立性（↓分離性・分自性）が受けとられます。こういう言語表現・言語表記の中で、

訴え用とされる語詞が、意字として、文末に光っています。

中国語の文構造（語順）が、日本語的・英語的な特性をそなえていることも、ここにまた思いおこしたいことです。

第八章 言語と文末詞

——日本語にはなぜ文末詞が栄えているのか——

第一節 諸言語の口頭語の世界

上来の小究によれば、言うところの文末詞は、およそ口頭語の世界のものであると見られます。すべては会話上の問題だ、とも言ってみたいものがあります。

諸多の言葉に、会話上、文表現での文末詞的要求があります。(このさい、「文末詞」と言うことをひかえますなら、「文末詞的なもの」と言うことができましようか。)

世界の諸言語に、口頭上(会話上)、文末詞的なものがさまざま見られるようであります。これは、なんとも興味ぶかいことと言わざるを得ません。

第二節 対話文の世界

口頭語上の対話文には、文末詞的なもの（↓文末詞）ができて当然なものではないでしょうか。抽象論的には、諸言語に関して、この当然が予想されます。なんとすれば、対話文は、つよく相手に訴えていくのを本質とするものだからであります。対話文は、直接に相手を予想します。——相手に直面します。「文は訴えの表現である。」と言える文が、対話文にあつては、おのずから、強度の訴え文になっていきます。そのように訴える時、訴えの言語心意が、おのずから、特定の訴え要素をよぶこととなります。特定の訴え要素は、すなわち「文末詞的なもの」であります。

私は、その明らかな特定の要素を、品詞論上、文末詞と名づけたのでした。

会話（あるいは口頭語）は、一方に、書記されるばあいもあつて、他方に、音声化されることが一般的です。

対話文が、音声表現として、相手に訴えかけられる時は、文末に、声調上の訴えが色濃く（音声あざやかに）出てきます。諸言語にあつて、たとえば、文末詞または文末詞的なもの出現しないばあいにも、その文表現音声に、文末声調の諸傾向が出てくることは、多言を要しないことでありま

しよう。たとえば、フランス語の文表現音声にあつても、各文の文末に、その文表現ごとの文末声調が出るはずですよ。——そこに、もとより、類型が認められることにもなりましょう。

「文末の声調は、どの言語にあつても、文末詞の代理者になりうる。」との一則が存立します。

第三節 日本語での文末詞生成発展の因

諸言語を見とおす時、日本語には、ぬきんでて文末詞が発展していると言えるように思われます。これは、理由のあることに相違ありません。どこに理由を求めたらよいのでしょうか。

文末詞は、一つの形態素でありましょう。とすれば、私どもは、これの生成発展の因由を、文法上に求めるべきこととなります。

日本語の語順（語序）——構文法——のばあいにあつて、文末詞がよくできています。英語の語順のばあいには、日本語の文末詞に相当するものが、ほとんどできていません。中国語には、——（どのような語順のものと言えばよいのでしょうか。——若干の文末詞ができています。

日本語の文末詞、「ネ」や「ヨ」などの生成を、ゆるす言語とゆるさない言語とがあるということになりましょう。

構文差（語順差）ということになれば、第一には、「S↓V↓O」の形式をとるか、「S↓O↓V」の形式をとるかということが、問題になりましょう。第二には、日本語に即応して言えば、「体言＋助詞」の格助詞とされるものが、まさに体言のあとにおかれて後置詞であるのと、英語のように、格助詞相当のものが前置詞になっているのとの差異が問題にされましょうか。

「S↓V↓O」の英語では、口頭語世界でも、「ネ」的なものが成りたち得ていません。——どんなにくだけた言いかたのばあいにも。

「S↓O↓V」の日本語は、かねて述べてきたように、また、右の構文差（語順差）の論から推知されるように、その文表現構造が、文末決定性の表現構造になっています。このことが明白である言語に、文末詞は繁栄しているとされましょうか。文末詞繁栄の根拠は、文表現構造の文末決定性という本性にあるとすることができるようです。

文表現構造の文末決定性というものが、日本語ほどに顕著に認められない言語には、文末詞は繁栄していないのが道理かと思われれます。

文末詞生成発展の因由については、すでに、本書の諸所で、ふれるところがあります。それは、所論・考察の、おのずからの展開であったと言わなくてはなりません。

左に、ご参照を乞うを得ばと思ひよります個所のページを連記します。

p.45 p.50 p.55 p.98 p.99 p.121 p.176

結 章 文末詞言語学

文表現の末部は、言語研究上の一ポイントだと考えられます。対話文の文末ともなれば、その、言語研究上の一ポイントであることが、いつそう明らかでありましょう。

すべて、文表現末は、対他の作用の發揮される重要箇所です。ここに、私どもは、文末法とでも言うべき、生きた文法（表現法）を認めることができます。

対話文のばあい、ここに、文末詞的なものの世界が開けています。したがって、ここには、文末詞法とも言うべきものが認められることになります。

○ワタシニデスツテ↓

私にですか？

これに、「テ」という文末詞的なものが認められます。文末詞法のはたらきが明らかでありましょう。

○そこに立ちどまらないうでください。

というのにあつてさえも、「ください」が、文末詞的なものにちかいはたらきを示そうとしています。「そこに立ちどまらないうで　ネ。」というのを思いおこしていただきたいのです。文末詞的なものの世界のひろがりが見えるのではないのでしょうか。

そういえば、中国語にも、

○你是中国人、是不是。

あなたは中国人ですか。

などの言いかたがあります。これの最後の「是不是」も、文末詞的なはたらきをしようとしているものではないでしょうか。

文末詞的なものの世界が、広く見わたされます。文末詞法とも言うべき文法（表現法）のはたらく世界が、広く見わたされます。

文末詞問題は、言語研究上の、一般言語学的沃野をなしていると言うことができます。対話あるいは談話の研究にあつても、こうした沃野に、核心的なテーマを見いだすことに、ぬかりがあつてはなりません。

元来、文末詞は、その存否からして、すでに、全言語界での主要研究問題になるものと考えられ

ます。

文末詞言語学の名は、じつに望み多いものでありましょう。

あとかき

「まねび」・「まなび」のこの限りないたのしさを味わわせてくださる何かに、私は、つつしんで感謝します。

町博光さんには、多くを助けていただきました。ありがとうございます。

三弥井書店社長吉田栄治さん。私に「まねび」をにこにこことおすすめくださいまして、ありがとうございます。

この本をお手にしてくださるかたがたに、伏してお礼を申し上げます。

平成元年三月三十一日

藤原与一

著者 略歴

明治四十二年一月 愛媛県にうまれる

昭和十二年三月 広島文理科大学卒業

昭和四十七年三月 広島大学定年退職

現在 広島方言研究所をいとなむ

主要著者

昭和四十七年 八月 『方言研究の回顧と展望』〈方言研究叢書第1巻〉(三弥井書店)

昭和四十八年 四月 『昭和日本語方言の記述』〈昭和日本語の方言第1巻〉(三弥井書店)

昭和四十九年 十月 『四国三要地方言対照記述』〈昭和日本語の方言第2巻〉(三弥井書店)

昭和五十一年 一月 『瀬戸内海三要地方言』〈昭和日本語の方言第3巻〉(三弥井書店)

昭和五十二年 十二月 『中国山陽道三要地方言』〈昭和日本語の方言第4巻〉(三弥井書店)

昭和五十六年 七月 『中国山陰道二要地方言』〈昭和日本語の方言第5巻〉(三弥井書店)

昭和六十一年 二月 『九州東部域三要地方言』〈昭和日本語の方言第6巻〉(三弥井書店)

文末詞の言語学

平成2年7月15日 第1刷発行

定価 2500円
(本体2427円)

©著者 藤原与一

発行者 吉田榮治

発行所 株式会社 三弥井書店

〒108 東京都港区三田3-2-39
(03) 452-8069 振替東京 9-21125

大文社小石川

ISBN 4-8382-9025-X C1039 P2500E

言語の学 シリーズ
(広島方言研究所)

第一冊 私の言語の学

第二冊 言語研究 方法と方法論

第三冊 文末詞の言語学